伯爵令嬢シナモン 第2部 「コンウォールの才媛」

狼皮のスーツマン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

伯爵令嬢シナモン 第2部 「コンウォールの才媛」

【Nコード】

N7566J

【作者名】

狼皮のスイーツマン

【あらすじ】

今回のお話は、第一部「飛行船の殺人」に遡る5年前の物語です。ロンドン近郊の修道院に寄宿していた十三歳のレディー・シナモンが夏休みで故郷であるコンウォール州リザード市に帰省してきました。

シナモンが夏休みの宿題に、？かもめ岬？に存在する溶岩の謎を解くため調査していると、実家であるリザード城の庭師の孫ジョン少年が、測量器材の望遠鏡から殺人の瞬間を目撃してしまいました。

殺されたのはシナモン一族で、シナモンを娘のように可愛がっていた人物。その人はシナモンを遺産相続人に指名していました。捜査の途中で、灯台守がさらに殺され、町の住民が不安がっている中、恒例のリザード祭りが増されることとなります。リザード祭りのハイライトは、演劇『トリスタンとイゾルテ』で、シナモンは主役である英雄トリスタンの役を引き受けます。

今回のゲストは、サー・アーネスト・サトウ。考古学に精通した元日本公使です。また、シナモンを影ながら護衛するのは？アラビアのロレンス？ことトーマス・エドワード・ロレンス中佐、そしてのちに？ヨーロッパー危険な男？と恐れられるオットー・スコルツエニー少年が登場します。三人とも歴史上に実在した人物です。

『トリスタンとイゾルテ』上演中、レディー・シナモンに忍び寄る刺客の影、ロレンスはシナモンを守りきれぬのか？ 殺人事件の裏側で暗躍する魔少年オットー・スコルツエニーの真の狙いはどこにあるのか？

それでは伯爵令嬢シナモン第二部のはじまりはじまり。

あらすじ・目次・登場人物（前書き）

警告：まあ、常識の範囲で。

あらすじ・目次・登場人物

【目次】

雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ3

序章

? シナモン、ふたたび

? トリスタン島とイゾルテ島

? 男装の麗人

? 終章 ウバ・ティー

あとがき（作家様ごっこ）

雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ

【主要登場人物】

リザード城の関係者

1 レディー・シナモン；13歳の伯爵令嬢

2 ジョン少年；第1の殺人事件の目撃者

ジョージ・セシル家の関係者

3 ジョージ・セシル；第1の殺人被害者。大農

園主

4 エリー夫人；ジョージの妻

5 チャールズとエディック；ジョージの従弟

6 モーガン；ジョージの友人

デボン・コンウォール警察

8 レザー警部と駐在の若い巡査；事件担当者

来訪者その他

9 アーネスト・サトウ；元日本公使の考古学者
10 トーマス・エドワード・ロレンス； アラビ
ス アのロレン

11 オットー・スコルツェニー；謎の少年

12 灯台守の老人；第2の殺人被害者

13 佐藤と中居；雑誌『東京倶楽部』の記者とカ
メラマン

劇中劇登場人物

14 トリスタン；イゾルテと禁断の恋におちるマ
ルク王の甥

15 イゾルテ；アイルランド王女にしてマルク王
の王妃

16 マルク王；聡明なコンウォール国王

あらすじ・目次・登場人物（後書き）

伯爵令嬢シナモン 第1部 「飛行船の殺人」

続編です。

レディー・シナモン、家宰ウルフレザー以下一同、

礼。

雑誌『東京倶楽部』の非重要なお知らせ

ここは東京に本社がある雑誌『東京倶楽部』の編集室です。編集長の机の手前には記者やカメラマンの机が並べてあり、並んで座っているのが、記者の佐藤氏とカメラマンの中居氏でありました。ちょうど昼休みで、二人はコンビニで買ってきたカップラーメンをすすりながらノートパソコンのキーボードをたたいているところです。

「しっかし、先輩、スイーツマンってアホだと思いませんか？」

「うん、俺もそう思う」

「『非重要なお知らせ』なんか、ほとんど誰もみてませんよ」

「そうだな、全くその通りだ」

「『に思うこと』のシリーズを読みましたか？ 偉そうに……」

「……って突っ込みたくなつたでしょ？」

「俺も思った」

「『スイーツマンの散歩道』、食通ぶってますよね」

「そうだなあ」

「『もう一度妻をおとすレシピ』もそろそろネタが尽きてきたよう

だし」

「俺もそう思う」

佐藤氏はラーメンを食べるのをやめて、煙草をふかしはじめました。

「だいたいにして、主力作品『飛行船の殺人』も更新の度合いが頻繁すぎて、苦情が出てますよね」

「その通りだと俺も思った」

そこで中居氏は、会話をやめてラーメンをすすります。ところが佐藤氏は、

「そうだなあ……まったくその通りだ……俺もそう思う……」

……」

と会話が途切れたにもかかわらずあいづちをうちつづけているではありませんか。中居氏はそこで初めて、佐藤氏の異変に気がついたのです。

……ん、先輩の机の上の風邪薬。

それをひつたくって錠剤をみました。そこにはなんと、風邪薬ではなく、

自白剤 と書かれていますではないですか。

「だっ、誰だーっ、すり替えた奴は……」

中居氏が携帯で救急車を呼んでいるとき、パソコン画面にはスイーツマンの画像が微笑みを浮かべていたのです。

(ちよつと、ミステリアス〜っ)

一同礼!

序章

リザード市は、イングランド島西端コンウォール半島に位置している。そこには大西洋を臨んだ岬にゴシック風の城館リザード城がある。麓の市街地から城館にたどり着くには少し坂道を登らなければならぬ。

坂道を、自転車を押した郵便配達員が行き、やがて頂きにたどりついた。頂は城壁に囲まれており、内部にはいるには、北門か南門のいずれかを通らねばならない。郵便配達員が、峻厳な北門をくぐると、意表をつくかのように華やかな薔薇園となり、そこを左に曲がったところにある北館へと歩いて行った。

リザード城の郭は、薔薇園を中心に、西にたたずむ本館と、北門・南門に隣接した南北の別館が存在する。郵便配達員が、北館にある執務室の扉をノックすると、燕尾服を着た初老の人物が現れた。

「ご機嫌よう家宰さん、お手紙ですよ」

郵便配達員はそういって封書を初老の男に手渡すと、自転車に乗って、もときた坂道をくだっていった。初老の男は受け取った封書の宛名と差出人を指でなぞって読んでみた。

姫様宛だな。……おお、これはこれは、なつかしい。あの、アーネスト卿からだ。

そう呟くと、家宰は杖をついて本館へと向かった。

扉を開けた途端、甘い紅茶の香りが漂ってくる。部屋は、おびただしい蔵書を収めた広間となっており、テーブルの上には、古代の

壺、大理石の彫刻、青銅剣、それに開かれた数冊のノートが置かれていた。そこがその人の研究室となっている。研究室のもつとも奥には大きな事務机があり。手前にはソファとテーブルの応接セットがある。

「お手紙が届いたのでですね。お疲れさまです。紅茶をいれているところでしたので、どうぞおかけください」

古風なドレスに身を包み黄金の髪を後ろに結った若い貴婦人が、銀ポットから、二つのティーカップに琥珀色の液体を注いでいる。

私はリザード伯爵セシル家の家宰スイーツマン・ウルフレザー。リザード伯爵家は、チューダー朝から続く古い家柄でしてな、他家とは少しばかり違ういい回しをすることもあるが、そのところはご容赦されたい。伯爵様を御屋形様^{おやかたさま}、伯爵令嬢を姫様、そして執事長のことを家宰^{かさい}と呼ぶのが習わし。当家には自慢の姫様がいらつしやる。

ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザード

十八歳。いずれはリザード伯爵家を継いで伯爵夫人となられる。職業は考古学者、あだ名は？コンウォールの才媛？。聡明で優雅、そしてお茶目なところもある方だ。

では、姫様の物語を始めるとしよう……。

軍艦・商船・漁船……。

すこしかすんではいるが、東京・神奈川・千葉の沿岸各都市を見渡せる東京湾の真ん中に小さな外国貨物船が一隻漂っていた。デッキには二人の青年がいて、一人が空き缶を宙に放ると、もう一人が海面に落ちる前に三発の風穴をあけた。

拳銃は ルガーP〇八 と呼ばれるもので装弾数八発の銃だ。薬莢が銃の真上に飛ぶという特徴があり、少し時間がかかるが、慣れてしまえば至近距離での銃撃戦で絶大な威力を発揮する伝説の拳銃だ。

「相変わらず見事だね、スコルツェニー」

「やってみないか？」

スコルツェニーと呼ばれた青年は、拳銃を相棒に投げて渡した。するとそれを受け取った相棒が、空き缶の沈む前に、四発めの弾丸を決めて水中に沈めてから、持ち主に投げて返したのである。

「君こそ、見事だよ、ミューラー」

スコルツェニーは、やや癖はあるのだが、相手の長所を見いだすと賞賛することを忘れない若者だった。秀麗な容貌をしている。頬には深い傷があるのだけれども、隠そうともしせず、むしろ誇りにしているようでもある。

相棒のミューラーはごくふつ々の青年にみえる。スコルツェニーのような、強烈な？オーラ？を放ってはおらず、逆に、ミューラーの存在がスコルツェニーを一般人のようにカモフラージュしている。ミューラーが、

「ハウスホーファー教授、日本軍部との同盟工作、うまくやっているかなあ」

というと、スコルツェニーは答えた。

「教授のことだ、抜け目はないさ。なにより日本軍部には教授の信奉者が圧倒的に多い」

そしてさらに、

レディー・シナモンにまた会える。

とつぶやいたのだった。

第1章 シナモンふたたび

牡丹桜の咲く季節である。東京お茶の水駅から少し歩いたところに三階建てのビル、雑誌『東京倶楽部』があり、その二階編集室に隣り合った席に座り煙草をふかす男が二人いた。記者の佐藤とカメラマンの中居である。

「先輩、夏つすねえ、天気いいつすねえ」

「中居、夏だなあ、天気いいなあ」

二つの煙草の煙が、ドーナツの形になって天井に、ふわふわ、と昇っていく。そこへ、ばん、と扉をあけて編集長が飛び込んだ。た。

「いやあ、佐藤ちゃん、中居ちゃん。お手柄だねえ、君たちが取材した豪華飛行船シルフィーの特集、大当たりだよ」

「それはそれは……」

褒められたというのに佐藤はうつろな眼差しだった。横にいた中居は、

「いま、何をいっても駄目つすよ、シルフィーから戻ってきて以来、先輩は廃人も同然ですって」

「あの姫様に恋煩いしているのかね？」

「がらんがらんがらんっ……編集長、おお当たりっ！」

福引きの鐘鳴らしをまねている中居を無視するかのように、編集長は、こほん、と咳払いし真顔になった。

「佐藤、中居、社命だ。あのシルフィーに載っていた記事と写真で紹介した『姫様は何者だ?』という問い合わせが雑誌『東京倶楽部』に殺到している。早速、追加記事を出すことになった。取材

してこい」

中居が大げさに驚いて、

「取材？ いいんすか？」

といつて問い返したのだが、佐藤はまだ夢うつつをさまよっていた。

「よかったですね、先輩」

「天気いいなあ、中居、夏だなあ……」

「まだやってるんすか、先輩。さあ、いきましょいきましょ。お仕事ですよーっ！」

中居はカメラギヤシットの吊革を肩にかけると、佐藤の背中を押して雑誌『東京倶楽』ビルから市電に飛び乗った。二人が向かったのはイギリス大使館である。その職員と交渉してシナモンについての情報を集めることにした。暖炉のある応接間で二人に対応した日本語が堪能なイギリス大使館職員が、

「おおつ、雑誌『東京倶楽部』『特集豪華飛行船シルフィー』の記事、読みましたよ。彼女は、本国ではちよつとした有名人でしてね、五年前のものですけれど新聞の切り抜きがあります。ご覧になりますか？」

ときいたので、いつもは取材を仕切っている佐藤に代わって中居が、

「姫様はいま十八歳だから五年前となると十三歳だよなあ。」

と小さくつぶやいてから、

「ぜひお願いします」

と答えた。五分ほどして大使館職員が一冊のファイルをもってきて応接テーブルの上で開いた。それまでずっと茫洋ぼうようとしていた佐藤

が急に大声をあげた。

レディー・シナモン。 姫様か！

五年前の切り抜きの新聞記事の見出しには、

考古学界の妖精、コンウォールの才媛シナモン十三歳デビュー
と書いてあった。

第一次世界大戦が終わってからさほど歳月は流れていない。イン
グランド島の南西から大西洋にむかい狭長にのびたコンウォール半
島の先端に小さな町がある。北のかもめ岬、南のリザード城岬、こ
の二つの岬に挟まれた入り江に築かれたのがリザードの港だ。ここ
の町はリザード伯爵領となっており、領主のセシル家からは海軍大
臣も輩出している。

その夏も町の北にある、かもめ岬には、髪を短くそろえた短黄金
の髪の貴婦人が女子修道院から帰ってきた。青く染めた木綿の服を
身にまとい、頭にはトレードマークのかんかん帽を被っている。

やさしい偏西風がふく岩がところどころ露出した牧草地で、羊が
放牧された坂道を、ふうふう、いいながら登ってくる老人がいた。
その老人を望遠鏡のついた測量器材であるところのレベルをのぞい
ていた少女が、レンズの向こうに、みつけて微笑んだ。老人がしば
し息継ぎをしたあと、

「私は、アーネスト・サトウ 君がりザード伯爵のご令嬢だね？」
というと、少女は長いスカートの両端をつまんで会釈した。古風
な挨拶である。

「お会いできて光栄です、サトウ様。著書の『上毛の古墳』を拝見

させて戴きました。素晴らしいレポートですね……私は、ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザード。シナモンでけっこうですわ」

私の著書を読んだ？ 十三歳という話しではないか？ ……
なんと優雅な娘なのだ！

アーネスト・サトウと名乗った老人は、シナモンが立っている場所を見渡した。

かもめ岬は大西洋にむかって東に突き出た絶壁である。麓の港町から蛇行した未舗装の坂道を登ってくる中腹でテラスのように開けた場所だった。そのテラスとなった地面に、縦五メートル、幅一・五メートルの長方形をした坑^{あな}一つを綺麗にほりこんでいる。地層を観察するための試し掘りだ。

「地質調査でもしているのかね？」

「はい。夏休みの宿題で自由研究レポートのための調査をしています」

「なっ、夏休みの宿題？ なにやら本格的だね……」

調査地にはシナモンのほかに軽装の人々がいた。老夫婦、若夫婦に少年の五人だ。

「こちらは？ セシル家の？」

「はい、うちで働いてるみなさんです」

五人はそれぞれアーネスト・サトウに挨拶した。老夫婦は庭師で、若夫婦は主に調理師、少年は庭師の孫だ。その少年が、何気なくレベルの望遠鏡を覗いたとき、興奮して大きな声をあげた。

「たっ、大変だよ、姫様」

「どうしたの？」

「人が殺された！」

少年はシナモンに望遠鏡をのぞかせた。向けられた方向は、かもめ岬の南西で二つの島があった。一つは手前のトリスタン島、もう一つは奥にあるイゾルテ島だ。両島は、リザード港のある入り江の玄関に相当する場所にある。

シナモンが望遠鏡でトリスタン島、つづいてイゾルテ島をのぞいたが、そこに人影はない。若夫婦の夫である調理師も望遠鏡をのぞいたがやはりみつげられない。

「ねえジョン、人が殺されたっていうのはトリスタン島？ それともイゾルテ島？」

「トリスタン島だよ、姫様。男の人が棒で、もう一人の男の人を後ろから殴ったんだ。殴られた人が崖から海に落ちたんだ」

「おいつ、ジョン、エイプリル・フルはとづくに過ぎているぞ」

「本当だつてばシェフ、信じてよ」

ジョンと呼ばれた少年の祖父が、

「ジョンが正直者であることはシェフ、あんだだつて知っているだろっつ？」

といい、調理師の妻までもが、

「そうよあんだ、決めつけちゃ駄目さ。ともかく駐在さんに報せましょうよ」

と加勢した。調理師は頭を掻いてから大きくうなずいた。

「判った 姫様、ひとつ走りいってきます……ジョンも来い！」

早速、二人はかもめ岬の丘から麓の町へ駆け下りていった。

老紳士アーネスト・サトウは、同じように望遠鏡で二つの島をの

ぞいてみたが、人影は確かにない。かもめ岬に近いトリスタン島は無人島だ。望遠鏡で眼を凝らさなくても、目のいい人ならば岬から丸見えである。人殺しなどあればすぐに判ってしまうだろう。犯人はこちらがみていることに気づいて、すぐに崖の反対側に隠れたというのか？ それならいずれ、ボートが島影から出てくるはずだ。

町の駐在はジェイという若い巡査である。調理師と少年は、ボートでジェイ巡査とともにトリスタン島に漕ぎ出し、シナモンたちがいるかもめ岬にたどり着いたときは、もう夕刻になっていた。ジェイ巡査はシナモンたちに敬礼してから、

「やはり島には、人が殺されたような痕跡はみつきりませんでした。自分もジョンが正直者であることは知っております。しかし何かの見間違いということもあるでしょうから……」

巡査は少年の肩に手をやるのだが、少年は傷ついたようで涙目になっている。アーネスト・サトウは、

「今日はもう遅い。明日また調べてみるといいだろう」

と提案したので、捜査も、シナモンの自由研究の調査もその日は終了したのだった。アーネスト・サトウは、シナモンの父親の友人で少しの間シナモンのところに厄介になることになっている。シナモンの実家はかもめ岬の南側で、入り江に臨んだりザード港を挟んだ向こう側の城ノ岬にある。城ノ岬の断崖には、文字通り中世風の城館が築かれている。その城館がリザード城　シナモンの実家である。

若い調理師は実に段取りがよく、昼までに夕食の下準備をしてしまったためシナモンの宿題につきあう余裕があるのだ。しかしアーネスト・サトウの来訪については当主のリザード伯爵が、若い調理師に一言告げるのを忘れたため、調理師夫妻は、帰ってきてから宴の

支度でてんやわんやとなり、伯爵は若い調理師にご機嫌をとるため上等なワイン・ボトルを一本贈ることになったのである。城館を訪れた客人アーネスト・サトウは、そんなリザード城の住人たちをことごとく好きになった。

イギリスの応接室のレイアウトは、壁際の暖炉を基点に家具が配置される。床にはカーペット、中央にはリビングセットが配置される。芝生のある広大な敷地内にある洋風建築のイギリス大使館も同様である。その暖炉のある応接室で資料ファイルを閲覧していた佐藤に、隣にいた中居が話しかけてきた。

「ところで、先輩、アーネスト・サトウって、きいたことがあるんですけど……」

「飛行船の中で話題になっただろう。考古学にも精通したイギリスの外交官だよ。幕末明治に通訳で活躍した人だ」

「なあーんか先輩、飛行船での一件と同じパターンじゃないっすか。また老紳士すかあ？ まったく……姫様の前には情熱的な美青年とか現れないんすかねえ？」

「なにいつてんだ、姫様がまだ一三歳のときの話しだぞ」

「おおっ、先輩、復活してきましたね 姫様のことになるともう……可愛いっ！」

佐藤は、中居にげんこつを一発くらわせた。

大西洋に面した断崖にそびえるリザード城は、いかついゴシック調の石積み城館であるのとは裏腹に、客室が瀟洒なヴィクトリア朝様式の明るい内装であることが特徴となっている。ヴィクトリア朝様式というのは、同時代のほかの国のような統一された様式ではな

く、使っている人の好みで、様々な内装・家具をトツピングしていく方式だ。リザード城の内装はさほど華美でもなければ貧相でもない。しぶめの色調の部屋に、華やかな白い鏡台をワンポイントとして置く趣向になっており、昨日やってきた客人は二階にある一室に案内され休んだ。

朝方、目覚めたアーネスト・サトウは寢室の窓から外を眺めた。眼下には大西洋が広がり、城の断崖から少し離れたところにあるイゾルテ島、その奥にあるトリスタン島、さらに奥にはかもめ岬が入り江の港の向こうに臨むことができる。

イゾルテ島には灯台があるな　　待てよ、殺人があつたとす
れば、あそのこの灯台守ならば……。

アーネスト・サトウが起きあがると、ジョン少年がノックしてドアから顔をだした。

「あのおつ、アーネスト様、朝食のご用意ができたんですけどおつ……」

「ああつ、坊や、ちよつときてごらん。この窓からトリスタン島が見える。手前の灯台があるイゾルテ島からは、トリスタン島の裏側もみることができはるはずだね？」

寢台から起きあがってきた老紳士に、窓際に立つた少年は振り向いて双眼を大きく見開いて抱きついた。

「ありがとう、おじさん、僕を信じてくれるんだね」

「ああ信じるとも、朝食が済んだら、早速ボートを手配して島に行つてみよう。灯台守に話をきいてみるんだ」

二人は階段を降りて一階にある食堂にむかった。食堂は大広間になつており、奥の暖炉を基点に部屋中央には四角い大きなテーブル

が置かれている。テーブルには、金色の刺繍がはった赤いテーブルクロスで覆われてあり、燭台、ハムエッグとトーストを載せたウェッジウッドの皿、ティーカップ、それに紅茶を満たしたヴィクトリア朝時代の銀ポットが置かれてある。伯爵と伯爵夫人、それに令嬢のシナモンが客人を迎えた。

シナモンが、

「おはようございます、アーネスト様。朝食がおすみになりましたらイゾルテ島に参りましょう。ボートを手配しておきましたわ」と小首をかしげて微笑んだ。

はっ、速い。こっ、このご令嬢……なんて手回しがいいのだ。

老紳士アーネスト・サトウとジョン少年は顔を見合わせた。

第2章 トリスタン島とイゾルテ島

枅形門ますがたもんというのは、文字通り枅のように四角い箱のような形をした二重門で、密閉されたそこに敵兵を誘い込み殲滅せんめつする目的で付設された中世城塞施設のことである。絶壁に築かれたリザード城には南北に枅形門が存在している。港や駅がある市街地に出るには、北門から坂道を下っていかねばならない。

坂道を下るとすぐにリザード港となる。リザード港の棧橋には繋留された、漁船、小型貨物船、沿岸警備艇、ヨット、それにスポーツ用モーターボートが、ぶかぶかと弱い波に漂っていた。これら船舶のうちスポーツ用モーターボートが伯爵家が所有するものである。かんかん帽を被った少女、老紳士、それに庭師と庭師の孫の四人が、モーターボートに乗り込もうとすると、先客が後部座席で待っていた。駐在の若い巡査で、少しいらいらしている様子だ。

今度はイゾルテ島だと……トリスタン島に、死体がなかったのに何をいまさら調べるんだよおっ。

と小声でぶつぶついつている。

一同が顔を見合わせていると、

「駐在さん、朝一番のお仕事になってしまったから朝食がまだですわね。サンドイッチと紅茶を持参しました。よろしければ召し上がりませんか？」

シナモンが抱えてきた大きなバスケットを開けると、ポットとサンドイッチが出てきた。

駐在の若者は、しばしシナモンをみつめると眼を潤ませた。

「もっ、もしかしてこれ、姫様の手作り……」

かんかん帽の少女が小首をかしげて微笑んだ。

「あつ、ありがとうございます、姫様……じつ、自分は……感激です。ああつ、おいしいつ、死ぬーっ、幸せいっぱい死ぬーっ」

黙って食べよ駐在さん、一人で死ねばいいよ。

ジョン少年は巡査を後目に冷たくつぶやいた。

庭師の老人は、釣りの好きな伯爵に付き合っつて船頭役をするため、モーターボートの操縦ができる。老人は棧橋の繫留紐をほどくと、ガソリン・エンジン用の紐を引っ張っつてこれをふかし、ボートをイゾルテ島にやっつた。港から島までももの一〇分もかからない。

断崖の島の麓には、コンクリートで構築された小さな船着き場があり、そこにボートを繫留した。船着き場に降りて曲がりくねつた急峻な坂道を登りきるとようやく灯台にたどり着く。そこで駐在の巡査が叫んだ。

「おーいっ、爺じいさんはいるかい？ 入るよ」

そういつて駐在が灯台の横に付設されてある小屋に入っつていつてほどなく、真つ青な顔をしてそこから出てきたのだつた。ほかの四人ともおおよその察しはいつている。それでもきかねばならない。アーネスト・サトウが口火を切つた。

「どつしたのだね？」

「灯台守の爺さん、死んでます。背中に斧が刺さつてます」

シヨックのあまり全員が、しばらく声をだすことができなくなり、その場に立ちすくんだ。

呆然と立ちすくむ一群のなかにあつて、シナモンは、ふつ、と何かに導かれるように把手に手をやり、小屋のなかに入っつていつた。

後をアーネスト・サトウが追って、

「若い娘がみるものではない。戻りなさい、シナモン」

と叫んだ。するとすぐに老紳士と入れ違いにかんかん帽の少女が勢いよく外へ飛び出してきた。

ほら、いわんこつちやない。

と皆が思っていると、シナモンはまたも意外な行動をとった。灯台の周囲に自生している花を集めてきて小屋のなかへ舞い戻り、横たわる死者の少し手前にそなえて、ひざまづいて祈りを捧げたのである。

なかへ大人たちが入ってきた。

「修道院でそう教わったのかい？」

老紳士がそういうと少女はうなずいた。

小屋の構造は、北西隅に厨房、北東隅に灯台上部に昇るための螺旋階段、東西に窓、そして南に向けた出入り口が設けられている。家具は、北側階段下に寝台、南西隅にテーブルとストープ、それに西壁下に寝台が配置されている。遺体があるのは階段昇り口手前の床で、ほぼ入り口方向に脚をむける格好で横たわり、背中には巡査のいうように凶器の斧が刺さっていた。

老紳士と若い巡査、それに続いて庭師の老人が、シナモンの後ろに立って同じように祈りを捧げた。少年は祖父の命で外に待たされた。ほどなく若い巡査が口を開いた。

「灯台守の爺さん、後ろから一撃で、ぐさり、か……ジョンが話していた話しもりアリティーがでてきたなあ」

老紳士が続けた。

「現段階では、イゾルテ島の灯台守はトリスタン島での殺人を目撃し、口封じのために殺された　とみるべきか……するとジョンも危ない！」

それをきいた庭師の老人は、孫の名前を呼んで急に外に駆けだしていった。外では、

「どうしたのさあ、爺ちゃん。急に抱きしめたりしてえ」
というジョンの声がきこえる。

シナモンは、小屋の中と床に転がっている死体を注意深く観察しだした。部屋は荒らされた様子がない。死体は争った様子がなく、斧が刺さったからのたうち回った様子もなく、ほぼ即死という状態だ。もし、のたうち回ったとすれば、衣服や壁、床などに激しく血糊が乱れ散っているであろう。

横になった死体、背中に斧、首根っこが赤紫になっている。

シナモンは、しっかりと犯行現場の状況を絵として記憶した。調査は別個に自分の所見を手帖に書き込むと、

「それじゃあ、港に戻って医者を呼んできましょう。死亡推定時刻をわりださないと　」
といった。

こうして一行は、モーターボートに戻って再びリザード港へと戻ったのである。再出港はアーネスト・サトウとシナモン、それにジョンの三人は港で待たされ、巡査と庭師の老人、それに医者、三人がモーター・ボートに乗り込んで、イゾルテ島を指摘したのである。シナモンが、検死に立ち会った庭師から伝えきいたところによると、死亡推定時刻は昨晚二〇時から今日の三時の間だという。

学問を？象牙の塔？に例えるならば、リザードで出会ったかんかん帽の娘は、あたかも？象牙の塔？の頂きに舞う妖精だ。私がみた驚きを、十三歳の少女の奇蹟を、ここに記したいと思う。

『アーネスト・サトウの日記』より

その日から、トリスタン島とイゾルテ島で起こった連続殺人事件のことは駐在の若い巡査に任せることにして、シナモンは夏休みの宿題である自由研究を再開することにし、朝食をすませるといつもの顔ぶれでかもめ岬に出かけた。

いつもの顔ぶれといえば、庭師の老夫婦、調理師の若夫婦、それに庭師の孫である。若夫婦の夫である調理師は、夕食の仕込みとシナモンの父親であるリザード伯爵夫妻の昼食を準備がし終わる午後、調査地に合流する予定だ。代わりアーネスト・サトウが手伝いに参加した。

かもめ岬中腹テラスにシナモンたちが掘り込んだ四角い坑あな試掘坑の底には、飴状になってから冷えた溶岩があつた。アーネスト・サトウが注意深く底をみて、シナモンにきいた。

「シナモン、君は、この溶岩を調査しているんだね？」

「はい、この溶岩の存在によって、これまで地質学では、『かもめ岬は火山の痕跡である』というのが通説となっていました。ですが、雨上がりにかもめ岬を登るとたまに、このようなものを拾うことができますので、疑問に思っていましたわ……」

そういつてシナモンが、ポシエットからとりだしたのは小さな溶

岩のかけらであった。溶岩のかけらをみたアーネスト・サトウは鳥肌がたった。

「しっ、シナモン……君はこの溶岩のかけらの学問的価値というものを知っているというのかね？」

溶岩のかけらは、なんと土器片を包んでいたのだ。この場合二つの理由が考えられる。第一は火山が噴きだした溶岩が土器をのみ込んだ場合、第二は建造物が高熱を受けて、どろどろに溶けてしまった場合が想定される。シナモンは、アーネスト・サトウに所見を告げた。

「私はこの土器が、？溶融保壘いせいのほしほし？に伴う遺物であると判断いたしました。ただそれには、城門などの施設の残骸がなければ証明できません。ですから発掘しているのです」

？溶融保壘？というのは、攻城戦で火災が起こり落城しどろどろに溶けた砦のことを指している。

しかし試掘坑をみて、それが？溶融保壘？であることを瞬時に理解した者が、岬の頂からやってきた。

「ほう、？溶融保壘？だね。僕はオットー・スコルツェニー、オーストリーのウィーンから、フェンシングの国際交流試合に招かれてイギリスへやってきた。君は？」

「私は、ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザード。シナモンでけっこうですわ」

といってスカートの両袖を軽くつまんだ。

オットー・スコルツェニーと名乗った少年はシナモンよりも二歳年長で、銀色の髪、やや面長である頬には深い縦傷があり痛々しいのだが気にもとめないどころか誇りしているようだ。

頬に深い傷をもつ少年は、

「イングラント島はまるでインスピレーションの噴火口みたいだ。近代の思想的刷新は、僕が敬愛するダーウインの著作『進化論』から始まったといわれている。さすがは『進化論』の島。シナモン、君のような若い女の子が、大英博物館学芸員クラスの研究をしている。素敵だ。なんてすごい国なんだ！」

と絶賛した。アーネスト・サトウは、シナモンを絶賛する少年にもまた驚いた。

まだ十五歳ほどの少年ではないか？ スコルツェニー君、君もこの溶岩の意味が理解できるというのだね？

アーネスト・サトウは、オットー・スコルツェニーと名乗る少年の挨拶を受けて、自分も名乗って握手を交わした。スコルツェニーから話しをきくところによると、スコルツェニーは、第一次世界大戦の敗戦国オーストリーの首都ウィーン生まれで、中産階級の子供として生まれた。貴族の出ではないのだが品格があった。貴族的ないやむしる帝王のような威厳さえ感じる。頬にある深い傷は十度におよぶ古式にのっとった決闘によってできた傷なのだという。

少しして、スコルツェニー少年の後を追うように、岬の頂きから別な少年がやってきた。

「おいおい、スコルツェニー、イギリスまできてナンパすることはないだろう？ こんな可愛い娘をイギリスから盗み出したら、イギリスの男どもが逆上してまた戦争になるよ」

そんな冗談をいった少年をスコルツェニーは、
「僕と同じウィーン生まれでミューラーといいます。国際親善フェンシング大会のため選手として僕と一緒にこちらへ参りました」

と紹介した。

ミューラーも利発そうな少年ではあるが、スコルツェニーほど強烈な印象は与えない。ミューラーとスコルツェニーは冗談をいったり、屈託なくふざけあっている。

老紳士アーネスト・サトウは思った。

こうして二人並ぶと、スコルツェニー君が普通の少年にみえてしまう。ミューラー君がスコルツェニー君と一緒にいるということは、誰かの意思によって、彼のありあまる才能をカモフラージュしているのだろうか？

老紳士はまた、頬に深い傷のある少年と親しげに話しをする、かんかん帽の少女をみやった。少年と少女はまるで正反対の存在だった。市民に対する貴族、情熱に対する穏便、冷やかさに対する暖かさ……、しかし共通点もある。

スコルツェニー君は生まれながらの騎士だ。なるほど少年らしい熱情が決闘という形で噴きだすことはあるが、内面には底知れぬ哲学が確立されている。シナモンの才能が神に愛されたものだとなれば、スコルツェニー君の才能は……。

アーネスト・サトウはハンカチで額の汗を拭って、

いや、初対面の人に対してのつまらない憶測はやめよう、元外交官である私の悪い癖だ。

と思い直した。少年たちはシナモンと十分ばかり雑談をしてから、リザードの市街地にある小さなホテルに戻っていった。二人と入れ違いに若い調理師が、かもめ岬中腹テラスへやってきた。いつもな

ら、伯爵夫妻に昼食をだしおえてから調査地へやってくるのだが、その日に限っては早すぎる。

「ひつ、姫さまーっ、しっ、死体が浜辺に打ち上げられましたーっ！」

調理師は血相を変えて坂道を駆け上がりテラスにたどり着くと、
「ぜいぜい、と肩で息をした。」

シナモンがポットの紅茶をマグカップに注いで調理師にやると、
ふうふう、熱をさましてのみ一息ついたところでこう告げたのだっ
た。

「姫様、浜に打ち上げられたのは、ジョージ様でした。ジョンのい
ったことは嘘じゃない。確かに後ろから殴られたあとがあったって
話した」

「ジョージおじ様？」

シナモンは両手を顔にやってしばらく立ちすくんだ。ジョンもシヨ
ックだったようで、

背中を向けていたから判らなかつたけれど、殺されたのはジ
ョージ様だったんだ。

とつぶやいた。それを後目にアーネスト・サトウが横にいた庭師
の老人にきいた。

「ジョージ氏とレディー・シナモンとの関係は？」

「ジョージ様はセシル家の分家で、本家との関係も親しく、お子様
のいないジョージ様は、姫様を実の娘のように可愛がっておられま
した。正確に言えば叔父姪というほど近い親族ではありませんが、
セシル家は門閥ですので何代か経っても親戚づきあいをいまだに続
けているのですよ」

シナモンに愛された遠縁の親戚ジョージ氏とは何者か？

シヨックを受けてまだ言葉をだせないシナモンに対して不謹慎ではあるが、アーネスト・サトウは興味をもった。試掘坑にシートがかけられ、またしても調査は中断となった。

イギリスでは中世以降、貴族から分家した郷紳階層ジェントリーが発生し、富裕市民層ブルジョワと結びついて近代イギリスに大きな発言権をもっていた。ジェントルマンという言葉はここからきている。郷紳層が住むマナー・ハウスは莊園屋敷と訳され、木々や花で飾った庭園は今日のガーデンニングの基礎をなしている。

殺されたジョージ・セシルの屋敷は、リザードの城館・港町・かもめ岬のあるリザード川の右岸ではなく、川を挟んで向こう側の左岸に臨んでいる。東に面した正門には、アーネスト・サトウがリザードにきてから見慣れているユニコーンの紋章があった。ユニコーンの紋章こそがセシル一門の家紋なのである。ジョージ・セシルも郷紳であり、広大な農園を所有する資産家であった。

死体発見から二日後、リザード城とジョージ・セシル邸の中間に位置する南の森の一角にある墓所で埋葬が執り行われた。セシル家一門とリザードの名士たちがそろった。牧師が追悼の言葉を述べ終わったところで、空軍のレシプロ戦闘機が飛んできて花束を落としていった。どうやら故人は空軍にも縁故があるらしい。

成り行きで葬儀に参加したアーネスト・サトウは、参列者が多いわりには、ジョージ・セシル自身の身内が意外なほどに少ないこと

に気がついた。子供のいない故人の家族と近しい親族縁者といえは妻エリーのほかに、ジョージ・セシルの分家筋にあたるチャールズやエディックといった従弟とその家族、もつとも親しい友人といえはモーガンという人物くらいのもだった。故人の享年は五十歳である。参列者が小声にこんな噂話しをしていた。

「奥方のエリー様はまだ三十歳を過ぎたばかりとか……気の毒に」
「まだ若いのが救いだね。ご亭主の莫大な財産を相続したわけだから、いい持参金ができたというもの　美人だし再婚相手は蟻のよう群がってくるさ」

「しーっ、言葉が過ぎる！」

それをきいたアーネスト・サトウは、事件のアウト・ラインを描くことが出来た。葬儀のあと老紳士は、故人と親しかったシナモンを屋敷に送迎するため、セシル家の馬車を借りてジョージの屋敷を訪問することになった。

ジョージ・セシル邸の正門は東にある。御者をしていたアーネスト・サトウが入ってすぐの所に馬車を停めると、馬車に同乗していたジョージ・セシルの夫人エリーは、アーネスト・サトウの手を借り、シナモンに続いて馬車を降りた。花々で飾られた見事な庭を西へ通り抜けると二階だての居館玄関前にたどり着く。そこから北を向くとテニスコートがあり、居館とテニスコートとの間にはオークの古木がそびえたっている。

身内の少ないジョージは、シナモンの一家が訪ねてくるの何よりの楽しみにしていたとみえて、二つある客室のうちの一つはシナモンのための 子供部屋 とし、オークの古木にはシナモンのためにぶらんこをつくったほどだった。ぶらんこのあった古木を見上げて、シナモンは幼い頃を思い出した。

古木の太い幹をロープで縛ったぶらんこが揺れている。ジョージ・セシルが幼いシナモンを載せたぶらんこを押して遊んでやりながらこうきいた。長いスカートが風をもてあそびながらひらひらと舞っている。

「シナモン、大きくなったら何になりたい？」

「な・い・しよ」

ジョージ・セシルは背の高い男だ。スポーツマンで乗馬やヨット、それに狩猟を好んだ。このとき四十を越えていたのだが、動きがいたので十歳さばをよんでも誰も疑う者はいなかった。その人が笑っていった。

「つれないなあ、君くらいの女の子は普通そこで、『おじ様のお嫁さんになる』っていつてくれるものなのだよ」

「普通、女の子からは、そのようなことを口にしないのです」
少女は振り向いて少し困った顔をした。

「そういえばそうだね。レディーに対して失礼だったね。ではあらためて、大きくなったら私のお嫁さんになってくれるかい？」

長いスカートの少女はオークの木のてっぺんを見上げてからこうきいた。

「一つだけ願いをかなえてくれるなら……」

「願い？ いったい何だい？」

「空が飛びたいのです、私。銀色の翼が欲しいな」

少女を載せたぶらんこは、青いそらと芝生との間に振り子のよう

に弧を描いていた。難題である。今度はジョージ・セシルが困った顔をした。

銀色の翼を手に入れることが出来なかったジョージ・セシルは、しばらく経ってから シナモンの代わりとっては失礼にあたるが それでも十九歳も若いエリー夫人と出会い結婚したのである。エリーは細面をしたはかなげな印象で、周りを、（なんとかしてやらなくては……）と思わせてしまう女性だった。

そんなエリーが、

「シナモン……お願い、今晚は私を一人にしないで」

と涙目に懇願したのでシナモンはうなづいた。屋敷には召使いの老夫婦がいるがシナモンでなければ収まらない様子だ。このため、アーネスト・サトウは玄関先まで二人を送ると、リザード城に帰ることにした。

葬儀の疲れからか、シナモンに付き添われて寝台に休んだ夫人のエリーはそのまま深い眠りについた。それを見届けてからシナモンは、今夜泊まる？子供部屋？に入った。

夕刻というにはまだ間がある。喪服から平服に着替えたシナモンは、二階建ての居館南西隅に設けられた？子供部屋？の窓際に立つてみた。眼下には屋敷を巡らしたオークの木々があり、枝葉の隙間からリザード川の流れが望める。そう、屋敷の西側が川になっているのだ。屋敷林のすぐ崖下の川原には、ジョージ・セシル家専用の船着き場があり、ヨットにモーターボート、それにカヤックが繫留されていた。

トリスタン島に行くにせよ、イゾルテ島に行くにせよ、犯人が島に渡るにはボートを使つたはず。

シナモンは、お気に入りのかん帽を被つて階段下の裏口から船着き場に出てみた。船着き場は川の流れの反対側からL字形に掘り込まれており、ヨットとモーターボートが一艇ずつ、形の違うカヤックが三艘浮いている。故人のジョージ・セシルは、裕福であつたこともあるが、五十を越えたばかりであつたため、体力的にもスポーツを楽しむ余裕があつたのだ。

かんかん帽の少女は船の一つ一つを検分していくと不自然な痕跡を発見した。モーターボートの縁と、モーターの一部がざらついたり、傷跡には粘板岩の細片が食い込み、船底にはいくつかの粘板岩の小石が転がっていた。

間違いない、この船だ。おじ様と犯人はこのモーターボートでトリスタン島に渡つたのだわ。犯行を目撃したジョンの話によると、トリスタン島でおじ様を後ろから棒で殴つた犯人は男性。日没までかもめ岬にいた私たちは犯人が島から出ていくところをみなかつた。ということは……駐在さんたちがトリスタン島に渡つたとき、犯人は島から逃げ出したあとだつたのではなく島のどこかに潜んでいたということになるはず。

シナモンは手にした粘板岩の小石をみつめて、

一つめの鍵を手に入れた。

そつつぶやくとシナモンは居館に戻つた。居館の構造は東側を正面玄関とし、二階にある玄関の真上をバルコニーとしていた。二階

バルコニーから西奥階段までが大きなホールになっており、さらにその中央部は吹き抜け構造になっていた。バルコニーからホールを挟んで南側には当主の書斎、客室、子供部屋が並び、北側には夫人の化粧室、夫妻の寝室が並んでいる。かんかん帽の少女は、バルコニーの横にある当主の書斎をのぞいてみることにした。

書斎の出入り口はホールに面した北壁両端の二カ所であり、階段のある奥の扉からなかへ入ると左手に暖炉があり、西壁は全体が本棚になっている。東壁と南壁には窓があり、南東隅には白のグラウンド・ピアノ、そして部屋中央には事務机、とりビング・セットが置かれている。

大まかに書斎を眺めてみると別に不自然なことはない。しかし十三歳の少女は小さな異常を見逃さなかった。

書棚は整然と書籍やノート・ファイルが並んでいるのに、不自然に空いた、ところがある。

これも何らかの鍵。真実へと連なる何番目の扉を開く鍵だがはまだ判らない……誰かが何らかの目的で、その人にとって不利な情報が書き込まれたファイルを故意に抜き取っていったのだとしたら？

少女は部屋を出て厨房に向かった。当主が亡くなっても使用人の勤めは変わらない。シナモンは一階にある厨房に降りて使用人の老夫婦に話しをきいてみた。

シナモンが厨房に入ると使用人の老夫婦が忙しそうに夕げ支度をしていた。シナモンに声をかけたのは妻のほうだった。

「これはどうも、姫様。こんなところに何のご用でござえますか？」

「ええ、ジョージおじ様の件で、最近変わったことがなかったかとど

「うか知りたいのです」

すると老夫人がやってきて、

「口の堅い姫様だけにやいつておくけどさあ。あたしや二十年近く旦那様にお仕えしてきたんで、五年前に嫁いできた奥様よりも旦那様に味方するよ。このところのお二人はぎくしゃくしてたね。葬儀にもきていたでしょ？旦那様のお友達の、あの、モーガンさんの方。あの方がきてからだねえ……」

とささやいた。

それをきいた魚のソテーをつくっていた亭主が振り向いて、

「滅多なことを口にするな！」

と怒鳴ったので、老夫人は首をひっこめた。シナモンが無理に笑みを浮かべて顔のあたりで手を振り退室しようとする、後ろの階段から男たちが寄ってきて声をかけてきた。

「騙されちゃいけないよ、シナモン。あの女は、はかなげな悲劇の未亡人を装ってはいるが、むしろ陰で糸をひいている女狐だ。二人の馴れ初め。だってジョージに近づく口実に過ぎなかつたのさ」

「いや、チャールズ、僕は彼女はやはり悲劇のヒロインだと思うよ。悪いのは、全部あいつさ、エリーはモーガンに騙されて協力したに過ぎない」

そんなふうに、後ろから男の声がした。葬儀に参加していたジョージ・セシルの従弟チャールズとエディックの二人だ。シナモンにとっては戸籍上親族のうちにも入らないくらい遠い血縁ののだがセシル一門には違いない。

チャールズのいう二人の 馴れ初め とは五年前のことだ。

エリーを載せた二頭だての馬車が森にさしかかろうとしたとき、横合いの茂みから猪いのししが飛び出してきた。これに馬が驚いて暴走し、このとき御者が振り落とされてしまった。偶然、そこに馬に乗って狩りをしていたジョージ・セシルが通りかかってこれをみつけ、馬を走らせながら、馬車へ飛び移り、馬をなだめてエリーを救ったのだ。

近代あたりまで田舎ではなおのこと中世以来の騎士道が生きている。このように未婚の女性を救出した男性は　この女性に求婚する権利があり、女性は受託しなくてはならない……という暗黙のルールが存在した。エリーは若くはかなげで思わず守ってやりたくないような女性であり、長らく家族のいなかったジョージ・セシルは、当然のように彼女を妻としたのである……。

ジョージ・セシルの従弟二人のうち、夫人のエリーを敵視するチャールズは細身で背が高くしゃべるときに頬を振るわせるような特徴がある。眼は切れ長で神経質な感じのする男だ。他方のエリーにやや好意的なエディックは、肥っていて、頭を刈り上げにしているのが特徴だ。よく笑うのだが、会話の節目にときどき蛇のような冷たい目になるときがある。

かんかん帽の少女は、

「ご忠告に感謝します」

と無理につくった笑顔を浮かべてその場を立ち去ろうとした。

日が暮れて暗くなってきたとき、灰色のシルクハットを被った紳士が玄関に現れた。

「はじめまして、私は亡くなられたジョージ・セシル様の顧問弁護士です。奥様はいらっしゃいますか？」

大事な話。ほう、もうおいでなすったか。

チャールズとエディックの表情がにやけた。

灰色のシルクハットを被った弁護士を案内して、今は亡き居館当主の書斎に集まったのは、夫人のエリー、従弟のチャールズとエディック、そしてシナモンの四人だった。弁護士は封書を開いて故人の遺書を読み上げた。

私に万が一のことがあった場合、全資産三万ポンドのうち五千ポンド相当を妻のエリーに、残りすべてはシナモンに与えるものとする。

千五百ポンドで、当時の最高級リムジンであるロールスロイス・シルバーゴーストの新車を買える。遺書の内容はそこにいたすべての人を驚愕させるに足るものだった。エリー夫人は夢うつつ、チャールズとエディックの二人なぞは真っ赤になつて憤懣を隠せないでいた。

もつとも血の濃い俺たちを無視するといふのか？ エリーはともかく、シナモンは戸籍の上では親戚のうちにも入らないくらい縁遠いではないか！ 財産の大半を十三歳の小娘に与えるといふのか？

ジョージ・セシルの本家筋であるリザード伯爵の令嬢シナモンは、いずれ伯爵家の家督を継いで伯爵夫人となり、ジョージの何十倍もの財産を相続することになる。シナモンにとってはジョージの遺産

は大した意味をなさない。ここでいう伯爵夫人は、王国ならば女王の称号と同じことで、意味合いからすれば 女性の伯爵 をさす。かんかん帽の少女は思った。

遺産相続は危険なおいがする。私は命を狙われるでしょう。お断りするべきかしら いえ、駄目、犯人の思いつぽになる。むしろこれは千載一隅のチャンス、泳がせなくては……。

チャールズは、頬を振るわせながらシナモンにきいた。

「しつ、シナモン、きつ、君はこの話を断るのだろうね」

今度はエディックが猫なで声で続く。

「本来、君は遺産相続の圏外の人間だ。もちろん放棄してくれるんだろう?」

シナモンは、一度天井をみてから、はっきりした声で二人に返答した。

「私は未成年ですので、父に相談することにします」

子供だから、少し脅すようにいえばうまく事が運べるかと思っただが厄介な事になった。伯爵家には顧問弁護士がいる。ジョージの弁護士とむこうの弁護士が組めば、俺たちに勝ち目はまったくなくなる。残る手はただ一つ。

男たち二人の眼孔が怪しく光り輝いた。シナモンは、

「おば様は、葬儀でお疲れです。今夜はこのあたりで」

と帰るようにながすと、チャールズとエディックは舌打ちして居館を出ていくほかなかった。

トリスタン島の謎は解けました。次はイゾルテ島か。

シナモンは、夢つつつのままのエリーを抱きかかえるように、書

斎と同じ二階にある寝室まで送り、夕げは一階厨房から自ら運んで食べさせてやった。

東京皇居前一番町に所在する英国大使館は、一八七二年に横浜から移転してきた。佐藤と中居が訪れていた当時の英国大使館は、大正大震災の傷跡があり、？大使のバンガロー？と呼ばれた仮設の木造建物であった。大使館敷地内には、多数の桜が植えられており、職員がガラスの窓越しに庭の桜の木を指さした。初夏であり、葉桜となっていたが、それでも富士山や東京湾を眺望と重なって一枚の絵のようになっていた。

「この桜、誰が植えたものだと思いますか？」

中居が知恵熱をだしていると、代わりに佐藤が答えた。

「たしか、明治時代に駐日大使館公使をしていた親日家のサー・アーネスト・サトウが植樹したものだ」と記憶しています……」

「さすがは佐藤さんですね。サー・アーネスト・サトウとはもしかして親戚で？」

と職員がいった。

「残念ながら違います。桜についての記述は、何かの記事に書いてあったのを思い出しただけですよ」

隣にいた中居が肘で佐藤を小突いた。

先輩、この方にはどつきませんね？ 飛行船じゃ、「親戚じゃねえぞっ！」て俺をどついたじゃありませんか！

佐藤は無言で中居の頭を殴った。その佐藤が次の切り抜きをみて、（むむ……）と低くうなると、一緒に記事を読んでいた中居がまた

いった。

「姫様のピンチですね、先輩」

「お救いせねば！」

「やだなあ、先輩ったらもう、熱くなっちゃって。五年前つすよ、五年前……」

佐藤はあたりを見渡した。

「そつ、そうだった……しかしチャールズとエディックの野郎、姫様に手を出したらこの俺がぶちのめす。オットー・スコルツエニーのガキもそうだ！」

「先輩、先輩……まだ誰も犯人だって決まってる、決まってる、決まってる、弱い感じのエリー夫人だって怪しくないっすか？　そういえばエリー夫人との仲がとりざたされてるモーガンって人だって　意表をついてサー・アーネスト・サトウだって……だいたい、？さとう？て姓の人にろくな奴はいないでしょ？」

「中居……殺すぞ！」

佐藤たちが、そんな話しをしていると、雑誌『東京倶楽部』の本社から大使館に電話がかかってきた。編集長からだ。応接室には電話も置いてある。内線でつないでもらって、佐藤が受話器にでた。

佐藤ちゃん、例の姫様の居所がつかめたよ。群馬県だ。

「群馬県？　そういえばアーネスト・サトウは群馬県の古墳のレポ―トを書いていたよな？」

そうだ。それを知っているなら話しは早い。早速、行ってくれ。

「中居、群馬県に行くぞ すみません、このファイル、お借りしてもよろしいですか？」

佐藤と中居は大使館職員にファイルを借りると、すぐにまた市電に飛び乗って、上野から前橋行きの汽車に乗り換えた。

姫様は東京にある帝国ホテルに1週間滞在なされたため、私も同ホテルの一室で執務を行っている。姫様の日本滞在は少し長くなりそう。私も姫様も、土地勘というものがない。信頼できるガイドが必要だ。そこで、日本にいる知人に相談したところ、ドロシー・ブレイヤーというアメリカ女子留学生を紹介された。留学生とはいえ母国ではすでに博士の資格をとっている。

ドロシー・ブレイヤーは、京都大学に籍をおき、日本考古学界の重鎮浜田耕作博士に師事なされているとき。もちろん、日本語は堪能で、この国の事情を熟知している。

早速、家宰権限で、ドロシー・ブレイヤーと短期雇用契約を結び、リザード家執事の待遇で採用したいと本人に打診した。

『リザード伯爵セシル家家宰スイーツマン・ウルフレザーの日記』

私は、当時、日本の古代建築を研究していた。留学に必要な費用は母国や実家が送金してくれるが、なにぶんにも旅行費用がかかる。リザード伯爵家の執事職は悪くない。夏休みのパートとしては破格の報酬に私は喜んだ。

帝国ホテルのロビーでレディー・シナモンと家宰とに会った。レディー・シナモンの挨拶 コーテシー は、いままで出会った人中ではもつとも優雅でバレリーナのようにも思えた。私と同じく考古学をなさっているとのこと。仲良くできそう。 そう感じた。

こうして私は家宰といくつかの執務の引継をし、伯爵令嬢付きの執事として、一か月間行動をとることになったのである。

『ドロシー・ブレイヤー博士の回顧録』

ここでふたたび話しを五年前に戻す。

ジョージ・セシルの屋敷を後にしたシナモンは、リザードの駐在所を訪ねていた。

第3章 男装の麗人（1）

駐在所は市街地中央部にあるリザード教会の通りを挟んだ南向かいにある。朝食の時間だ。その若い巡査が頭を掻きながらでて、

「姫様、すみませんねえ、こないだも頂戴していますのに　　またも手作り……」
とバスケットを受け取った。

なかに入っているのはスコーンと果物、それに紅茶の入ったポットである。巡査の表情がいまにも溶けだしそうなのはいうまでもない。十三歳の少女が小首をかしげて微笑んだ。

「ところで？　灯台守のお爺さんじいですけど、ご身内の方はいらっしやるのですか？」

「孫娘が一人います。市内の病院で入退院を繰り返しているのだとか……けっこう費用もかさんでいるはずですが、灯台守の収入ではかなりきつかったでしょう」

シナモンは若い巡査に礼をいって立ち去ろうとしたとき、建物の陰から、何者かがこちらをみているように感じた。玄関先まで見送った若い巡査がシナモンにいった。

「どうしたんですか、姫様？」

「いいえ、なんでも……」

外では伯爵家の馬車が待っている。シナモンは怪しげな気配を感じた街角をみやってから、アーネスト・サトウの手を借りてその馬車に乗り込もうとした。すると別な方向から声がした。

「ひっ、姫様　　いいところでみつけた……助けてくださいー！」

かんかん帽の少女が、ちょっと驚き振り返るとすぐに微笑みに代わった。情けない声をあげた主は、リザード商工会の幹事をしている青年だった。

「夏祭り恒例の演劇で、主役の子が怪我をしちゃいましてねえ。姫様なら去年、主役をやっていたらっしょ。ここはどうかまたお願いしたいですよ」

アーネスト・サトウが、シナモンにきき返した。

「主役？ 演目はなんだね、シナモン？」

「『トリスタンとイゾルテ』ですわ」

「『トリスタンとイゾルテ』？ ではイゾルテ役だね？」

シナモンは困ったように笑った。

「いえ……それがトリスタン役なのです」

アーネスト・サトウは意外な顔をした。そこに商工会幹事の若者が口を挟んだ。

「イゾルテ役に見合う女の子なら、化粧でもすればなんとかなるんですがねえ。トリスタンといったら色男でしょう、適役がないんです。去年、姫様がトリスタン役をやったら大受けでした。姫様のトリスタンをみて興奮のあまり失神した娘がいたくらいですよ」

なるほど、男装の麗人というものが。

シナモンがためらっていると、青年は、

「こここのところ連続殺人事件があつて、町の人たちも不安なんですよ。ここはなんとか姫様のお力をもって助けて欲しいんですよ」

「わかりました。お受けいたしますよ」

老紳士は、かんかん帽の少女が静かにうなづくのをみて、

しかし……なにも命を狙われているようなこのときに。

となかばあきれて思うのであった。

かもめ岬の麓には、シナモンの父君リザード伯爵と地元の有志が資金を出し合ってつくった石積みすいせきのギリシャ風劇場が設けられている。地形を利用した掘り鉢すりばちのような構造をしており、斜面に設けられた観客席は上から見下ろすと扇形となる構造になっていた。

商工会の青年は舞台監督も兼ねており、アーネスト・サトウと一緒に劇場へやってきたシナモンに、

「姫様、悪いですねえ、リザード夏祭りまであと二日、本番までちよつとしかりハーサルができません。多少のアドリブはあってもいいですよ、周りでカバーしますからね」

と罰が悪そうに笑った。シナモンの来訪を待ちわびていたかのよううにすぐに第一幕がはじまった。

昔、慈悲深いマルク王が治めるコンウオール王国があり平和なときを過ごしていた。コンウオールの王城には、豎琴を奏でる美麗な青年騎士がおり王と廷臣たちを楽しませていた。饗宴のさなか、突然伝令がやってきて美酒に酔う人々に冷水を浴びせかけたのである。

わが君マルク王、西の海から強国アイルランド軍がやってきました。アイルランド軍は城近くの浜辺に船団を乗りつけ、敵将が、「われは騎士モルオルト、アイルランド一の勇者。わが祖国アイルランドは、コンウオールに朝貢を求め。従うなら朝貢を、拒むなら剣を持参してわが前へこられよ！」と名乗りをあげて上陸したと

のじつ。

思慮深き王は、

「敵は一騎討ちを挑んでおるようだな。わが国一番の騎士で対抗せねば……」

とつぶやくと、豎琴を奏でていた青年騎士が、軽くひとかき弦を鳴らしてから、豎琴を剣にかえ、

「叔父上、私トリスタンが参りましょう」といって立ち上がった。

浜辺には陣幕が張られ一騎討ちの支度はととのっている。そこへ乗りつけたトリスタンは、馬をかって、騎士モルオルトと対峙した。モルオルトは黒い甲冑を身にまとった偉丈夫、対する騎士トリスタンは銀の甲冑を身にまとった細身の青年であった。

「おとなしく属国となればよいものを、しかもこんな華奢な騎士をよこすとはコンウォールも落ちたものよな」

「コンウォールは自由だ。アイルランドの属国などにはならぬ」

双方はしばしにらみあうと、やがて、長槍を構えすれ違いざまに一撃をくらわそうと試み、衝撃でトリスタンの槍が折れた。モルオルトが不敵に笑った。トリスタンは剣を抜き、モルオルトの第二撃を剣でなぎはらい敵も剣を抜いた。幾度もの剣撃で火花を散らし、互いに血を流しながら、最後までどうにか立っていたのはトリスタンであった。騎士モルオルトの討ち死にをみとったアイルランド勢は遺体を載せて船を返した。

トリスタンの傷は深い。砂浜で倒れそうになったトリスタンに肩を貸したのはゴルヴナルという忠実な従者であった。

「トリスタン様、モルオルトは剣に毒を塗っていたに違いありません。海の彼方にあらゆる病気を治すという姫君がいるそうです。私

「がご案内いたしましょう」

そういつて意識朦朧もろろの状態にあつたトリスタンを小舟に乗せて海に漕ぎ出した。ところが従者ゴルヴナルが目指したのは、なんと敵国アイルランドだったのだ。あらゆる病気を治すという姫君こそアイルランド王女イゾルテであつた。宿敵同士、禁断の恋がここに始まる……。

リハーサルの第一幕をみていたアーネスト・サトウが、

「ワグナーの歌劇『トリスタンとイゾルテ』とは少し違うな」

と監督である商工会の青年にいうと、

「地元の伝説がベースなんですよ。一口に、『トリスタンとイゾルテ』とはいつても、いろいろありますからね。各国の劇作家が、コンウォールの伝説をもとにいろいろ脚色しています。いうなればワグナーだつてその一人に過ぎませんよ。つまらなかつたですか？」

「いやいや素晴らしかつたよ。ノーミスだ……シナモンにはこんな才能もあつたんだね」

そういつて喝采を贈つたのである。

かもめ岬の麓にある劇場でリハーサルをしているところだ。夏になるとかんかん帽の少女が戻ってくるように、同じ季節、かもめ岬の頂きに現れる人がいる。

青銅器時代ケルト人によって構築されたストーンサークル（環状列石）は オークルのまな板 と呼ばれる。 オークルのまな板 近

くには、BMWのサイドカー仕様オートバイが止められていた。石柱を環状に巡らし、その上に梁を載せた環状列石の上で輪をつくったロープを、ぶるんぶるん、と回転させて宙に投げるウェールズからやってくる男だ。

青灰色の瞳、女性的な容貌、どちらかといえば小柄。その男がいま宙に向かって投げたロープを抱きしめるようにたぐりよせ、「そーら、シルフィー捕まえた！」というと、いつの間に来たのだろう、少年二人がすぐ下に現れた。

『知恵の七柱』の著者トーマス・エドワード・ロレンスさんですね？」

ロレンスと呼ばれた男が、石の梁の上に腰を降ろし、立てた片膝に片腕を載せ、そこにかしげた頭を載せた。

「君たちは？」

「僕はウイーンからフェンシングの親善試合にきたオットー・スコルツェニーといいます。隣にるのが親友のミューラーです」

「ほう、どうして僕がロレンスだと判ったんだい？」

頬に傷のある少年が笑みを浮かべて答えた。

「？アラビアのロレンス？、あなたの肖像は世に溢れている 新聞、雑誌、もろもろの書籍……そしてなにより、あなたの放つオーラは常人よりも強くまぶしい」

青灰色の瞳をした男は、少年たちを 正確に言えばスコルツェニーを凝視した。

「スコルツェニー君、ここに居るのは偶然ではないね？」

少年はその質問には答える代わりにこう告げた。

「あなたと親しくしている かもめ岬の姫君 が、麓の劇場でリザード夏祭りのだしもの『トリスタンとイゾルテ』のリハーサルをし

ています　知っていますか、ロレンスさん。姫君がいま命を狙われているということを知っていますか？」

ロレンスの目が大きく見開かれ丸くなった。

同じ頃、リザード川右岸に臨んで構えてある主を失ったマナー・ハウス（莊園屋敷）に、ロールスロイス・シルバーゴーストが乗りつけてきた。車から降りてきたのは白のスーツを着こなした長身の男である。

男は仏頂面をした使用人老婦人の案内で、今は亡き館の主ジョージ・セシルの書斎に通された。書斎のある二階からは手入れの行き届いた庭を眺望することができ、幼少期にジョージ・セシルがシナモンのためにブランコをこしらえたオークの木もみえる。

やがて男は、書斎南東隅に置かれた白いグランドピアノに備えられた椅子に腰掛け、ワグナーの歌劇『トリスタンとイゾルテ』の前奏曲をピアノ用に編曲したものを奏でた。曲はイ短調和音で始まり、八長調となり、やがてまたイ単調へと戻っていくトリスタン和音である。二小節が終わり三小節めに入ろうとしたとき、ジョージ・セシルの夫人エリーが書斎に入ってきた。

「モーガン、来てくれたのね」

モーガンと呼ばれた男は、窓辺にもたれてエリーを抱擁し髪を優しくなではじめたのだった。

翌日、かもめ岬の麓にある屋外劇場楽屋に駐在の巡査が困った顔

をしてやってきた。

「姫様、なんとかこの舞台だけは取りやめにしていただけませんか
ねえ」

「氣遣っていただいてありがとうございます、そういうわけには
参りません。町のみなさんが楽しみになさっているのですから」

騎士の衣装を身にまとった少女が伏し目がちにいった。

「まあ、姫様のことだから、そういうとは思っていたのですがね、
しょうがない

実は父君であらせられる伯爵様からも要請されていましてね…
…本部からの捜査と姫様警護の派遣増員を申請しておきました」

若い巡査はため息をついてから、

「そろそろ教えてくださいよ、姫様……犯人が誰だかもう察してい
らっしゃるんでしょう？」

「おおよそは　でも決め手となる証拠や証言がありません……す
べては明日のリザード夏祭りで明らかになるでしょう」

このとき監督の青年が屋外の舞台で、

「第二幕のリハーサルだ。みんな集まってくれ！」

と呼ぶ声があった。観客席には前日と同じようにアーネスト・サト
ウが座っていた。ちよつと様子が変わったのは、そこに庭師老夫婦
と調理師若夫婦、そして庭師の孫であるジョン少年が加わったこと
だ。

明け方、アイルランドの騎士モルオルトとの死闘で毒刃による傷
を負い、従者ゴルヴナルの漕ぐ小舟がアイルランドにたどり着いた。

砂塵をまきあげて浜辺を疾駆する沿岸警護の斥候騎兵せっこうが二人をみつけ駆け寄ってくるのがみえる。

時化しけで船が沈んだのか？ いま行く。もう大丈夫だ、祖国アイルランドは漂着者にも慈悲深い国だ。

従者ゴルヴナルは、落ち着かぬ様子で主に耳打ちした。

「ここはアイルランド王国です。騎士モルオルトはイズルテ王女の婚約者で、トリスタン様が御名をいえばたちどころに殺されてしまいます。ここはどうか、タントリスという偽名をお使いなさいませ」
「……」

トリスタンは毒のために声もだせずに、どうにか、うなづくのみであった。浜辺で発見された主従二人は斥候騎兵のはからいで修道院付属の病院に預けられた。トリスタンはほかの傷病者とともに寝台を並べていると、ほどなくして、慈悲深い王女が診療にやってきた。長い黄金の髪、伏し目がちな目、繊細な指……。

この人がイズルテ王女か……なんと美しく心優しい王女なのだろう。

病床のトリスタンは思った。王女は寝台に腰を降ろし、トリスタンの傷口に毒消しの秘薬を塗り、侍女に手伝わせて包帯を巻いてやった。

王女と侍女が立ち去ると従者ゴルヴナが主人に耳打ちした。

「すばらしい女性ですが敵国の王女です。好いてはなりませんぞ、トリスタン様」

わっ、わかっておる。

五日ばかり経って、タントリスと名乗った患者とその従者は正体が明かされないうちに、もと来た浜辺で漁師を買収するとアイルランドから脱出した。

シナモンがりハーサルをしていた頃、町の居酒屋のテーブルに髭面の流れ者が、ボトルから手酌でコップにウイスキーを注いでおり、その横に男が腰掛け耳打ちした。

報酬は三百ポンド。

承知した。

髭面の男は、懐に拳銃を隠し持っている。依頼者と請負人は互いに横目でみやりながら薄笑いを浮かべたのだった。

第3章 男装の麗人(2)

朝方、コンウォールの王城城門前に騎士トリスタンとその従者ゴルヴナルの二人がたどりついた。従者が感慨深げに、

「とうとう帰り着きましたね、トリスタン様」

というトリスタンは深くうなづいた。門番が二人の姿をみつけ開門すると、マルク王が駆け寄ってきてトリスタンを抱きしめた。

「愛するわが甥よ、死んだかと思っていたぞ」

「叔父上、ご心配をおかけしました」

その様子を苦々しくみていた臣下たちがおり、メロートという諸侯は最先鋒であった。

マルク王が、王妃を亡くされて久しい。このままでは王位はトリスタンにいつてしまう。トリスタンはもともと外国人だ。外国人にコンウォールの王統を継がせるわけにはいかぬ。ここは新しい王妃をお迎えして御世継ぎをもうけて戴かねば。

メロートは諸侯たちを誘って王に進言した。

「偉大なるマルク王よ。そろそろ臣民はお世継ぎを待ち望んでおります。そろそろ新しき王妃をお迎え戴いてはいかかかと……」

このとき一話の燕が舞い降りてマルク王の指先にとまった。燕は黄金の髪をくわえていた。

ほう、髪の毛をくわえておるな。黄金の髪だ。

そうつぶやくと朗らかに笑った。

「この髪の娘を王妃とする」

煙に巻くのかマルク王よ、あなたはあくまで、王位をトリスタンに渡すというのか？ なれば親族であるわれらが、正統なるコンウォールの血筋を守るまでのことだ。

危うい。このままでは内乱になる。内乱が起こればイルランドが攻めてくる。そうすればコンウォールは終わりだ。

危惧したトリスタンが、マルク王の指先にとまっている燕をふとみると、見事な黄金の髪の色艶からアイルランド王女が思い浮かんだ。

あの娘こそ、内乱を防いでくれるに違いない。王女に嫁いでもらえば、コンウォールの臣下は一つにまとまり、アイルランドは仇敵転じて心強い盟友となるう……一石二鳥だ。

トリスタンはマルク王に進言した。

「黄金の髪の娘に心当たりがございます。その髪はアイルランド王女イゾルテのもの。マルク王よ、私はいま一度、アイルランドに参りとうございます」

王はとめたが、トリスタンはきかず、従者ゴルヴナルを伴って再び船上の人となった。

そのころアイルランドでは黒き竜が地割れから姿を現し人々を襲って、国民を恐怖に陥れていた。アイルランドの国王は、

黒き竜を倒した者に王女イゾルテを与える。

という触れをだした。

観客席にいた老紳士と庭師の老夫婦、調理師の若夫婦に庭師の孫の五人が、トリスタンに扮したシナモンの演技に魅了されていた。ジヨンは興奮して、

「かつこいいいなあ、トリスタンをやらせたら、姫様が一番だ！」
リザード城の人々は皆うなづいた。そんなリザード城の人々の席のはるか後方の席には、いつの間に現れたのだろう細身で小柄な男がいた。居酒屋にいた男だ。

あれが伯爵令嬢だな。

男は懐に拳銃を隠し持つており拳銃に手を触れようとしたとき、少し離れた席にまた青灰色の瞳をした人が座ったので、男はとりやめ席を去った。青灰色の瞳の人は？アラビアのロレンス？である。

観客席の外縁には、駐在所の巡查を始めとする警察官たち五名が陣どって警備していたが男が刺客だとは気づかないようだ。観客席の刺客が立ち去るとロレンスは後を追った。刺客もロレンスの気配に気づいたようで、演じてゆっくりした歩調から速歩きとなり、最後には駆けだした。ロレンスも駆けだした。

劇場からリザード駅前通りを抜け市街地に抜けロレンスが近づいたとき、刺客との間に軍用トラック数両がわって入って行く手を阻んだその隙に、刺客は市街地の小路地に逃げ込んでロレンスを振り切った。

翌日、リザード夏祭りとなった。朝方、花火が打ち上げられ、パレードは城から始まって、大聖堂、市庁舎、駅、劇場へとむかう。メインストリートに臨んだ宿屋の野外席で朝食をとっていたオットー・スコルツエニーとミューラーの二人は、デザートの莓シャーベ

ットをほおばりながらパレードを見物していた。

「ねえ、スコルツエニー。シナモンは、ほんとに撃たれちゃうよ」

「可愛いことをいうんだね、ミューラー。ありえないさ。姫君には、最強騎士 アラビアのロレンス がついているのだよ」

「そりゃあ、そうだけどさあ」

少年たちの話していることは物騒ではあるが、内容をきかずにおれば天使のようで、スコルツエニーの頬にある傷も野性的なしなやかさを感じさせ、遠巻きにみていたご婦人方の視線を釘付けにした。

パレードは、色とりどりの中世風装束で着飾った町の子供たちが楽器を演奏し、赤と青の旗を交互に投げ合う旗手、路面で宙返りをしながら沿道の群衆を楽しませている軽業師を気取った若者たちが続いていく。そして黄金で飾った白い馬車が現れた。人々は喜々として馬車をのぞき込んで少しがっかりした様子で、

馬車に姫様が乗っていない。

とぼやいたのだった。

順調にコースを巡ったパレードは劇場にたどり着いた。

かもめ岬の斜面を削って造られたギリシャ風円形劇場では、舞台が整えられている。前日、刺客がシナモンを狙っていたとの情報は、ロレンスを通じて警察に連絡がいつている。

リザードを所轄とするのは、デヴォン州およびコンウォール州警察というところで、本拠地はデボン州の州都エクセターというところにある。そこから応援にきた制服警官たちが拳銃を携帯せず警棒

のみを装備しているのは、（犯人を刺激しないように）との配慮でありポリシーであった。

イギリスには、銃器を携帯した特別警察というのものもあるのだが、首席治安官の判断で、特別警察の要請は見送られた。だが刺客は拳銃で武装しており、凶悪犯に対抗できるか内部からも疑問視する声があがっていた。

観客たちは、裏舞台がそういうふう慌ただしくうごめいていることに気づきもせず、着席して開演前のひとときを楽しんでいる。

そして

劇場後方には貴賓席というのがあって、伯爵夫妻とその客人であるアーネスト・サトウが座っている。庭師老夫婦と調理師若夫婦、それに庭師の孫の少年はいつもの席に陣取っている。拳銃をもたない制服警官たちは二十人に増員され、劇場の要所要所に配備されていた。

レディー・シナモンが演じるところの騎士トリスタンの物語『トリスタンとイゾルテ』は、第一幕のアイランド騎士モルオルトとの決闘、第二幕のイゾルテ王女との出会い、第三幕のコンウォール帰還と新たな旅立ちと続いていった。青年監督がいうように、モルオルトとの決闘シーンでは観客の娘たちが絶叫し早くも失神者が出て、やがて第四幕となった。

アイルランドに再上陸を試みるトリスタンの小さな帆船には竜と戦うために必要なくつもの武器やら防具やらが置かれていた。長弓、石弓、鎖のついて鉄球、槍、戦斧、長剣、短剣、そして鏡のよ

うに磨いた長方形の盾、丸く小さい盾……。従者ゴルヴナルが舵をとり、たどりつくまでの間にトリスタンが手入れをし、武器類の刃先には毒を塗った。

やがて小舟が竜の住みかに近い洞窟に、トリスタンと従者ゴルヴナルの二人が上陸すると、武器を浜辺から竜の住みかまで続く道筋の岩陰に点々と置いていくのだった。

小さな帆船に残したゴルヴナルには、最後の武器となる剣を預けた。最後の剣の名前を、？エクスカリバー？といい、トリスタンを愛する叔父マルク王が貸してくれた神剣である。神剣？エクスカリバー？こそ、伝説の？赤き竜？の化身アーサー王の佩剣はいけんであり、子孫であるコンウォール王国歴代王の証しでもあった。

松明たいまつを手にしたトリスタンが洞窟に入っていくと、後をつけていく者の存在に気づいたのだが、殺気を感じないため、つけてくる者のことはかまわずに洞窟最深部にまでおりていった。蛇行したり、上下したりする坂道の奥へ行くほどに、霧が濃くなっていく。トリスタンはむせりながら武器を道筋に置いていった。

霧は酸を含む障気しやうきで、目や皮膚がぴりぴりする。洞窟最深部はおきな空洞となっており、？黒き竜？がトリスタンを見下していた。？黒き竜？は巨大なトカゲのような姿をしているが前脚のところに蝙蝠こつむりのような翼がある。？黒き竜？が、言語ではなく、？心？に直接語りかけた。

よく来たなマルク王の甥トリスタン。アーサー王の末裔よ。吾われは汝を知っている。なにゆえに汝がここにきたのかもな。なあ、トリスタンよ、汝が吾を倒しアイルランドのイゾルテ王女をコンウォールに連れ帰り、マルク王の妃に迎えたでしょう。しかしそれが

何になるのだ？ 考えてもみよ、トリスタン。イゾルテ王女がマルク王の子を身ごもれば、汝はコンウォールの王位継承権を失うのだぞ。

？黒き竜？はあたかも不敵に笑みを浮かべたかのように話しを続けた。

侵略してきたアイルランド軍第一の勇者モルオルトを倒してコンウォールを救い、アイルランドと同盟を成功させた汝が得られる報酬とは何だ？ 百年の宿敵アイルランドは信用できるのかね？

コンウォールは、汝ほどに、汝を愛しているのかね？ ……なあ、トリスタンよ、かすかではあるが汝は？ 赤き竜？の血をひいている。コンウォールとアイルランドではなく、吾と汝とで盟約を結ばぬか？

？黒き竜？の言葉はトリスタンの胸に真実を突き刺さしていくのだが、その人は首を激しく横に振った。

「アイルランドの斥候の騎士は、浜辺にたどり着いた私を救って教会に運び込んだ。教会ではイゾルテ王女が私を介抱してくれた。そしてコンウォールのマルク王は、孤児である私を息子同様に育て、いままた王位の証しである？ エクスカリバー？を預けてくれた私は人を信じる」

そう叫んで、長弓で？黒き竜？に矢をいかけた。

愚か者め！

？黒き竜？は、白く濁った酸からなる濃い霧をトリスタンに吐きかけたのだった。

第3章 男装の麗人(3)

トリスタンは、？黒き竜？が吐く障気の直撃を盾でかわしながら、攻撃の合間に退路に隠し置いた長弓や石弓の毒矢、長槍を次々とつかって応戦し、最後の長槍で？黒き竜？の片目を潰した。すると？黒き竜？は一層凶暴化して尻尾で、トリスタンが準備した最後の盾を弾き飛ばした。直撃をかわしていたものの障気を吸って気管を痛めたトリスタンは咳き込みながら、ふらふら走って、どうにか小舟までたどり着いた。小舟には忠実な従者ゴルヴナルが待機しており、トリスタンの姿を見かけると駆け寄り、神剣？エクスカリバー？を投げ渡した。

片目を失った？黒き竜？は、強靱な後脚で跳躍し前脚についた翼を大きく広げて滑空すると、いまにもトリスタンに噛みつきこうとした。

(わが祖先アーサーよ。義に生きた聖王よ。人に、人である私に力を……)

どうにか両脚で踏ん張っているトリスタンが、最後の力を振り絞って鞘から剣を抜き放ったとき、神剣エクスカリバーに魂を宿すといわれるアーサー王本来の姿 赤き竜 の姿が剣身に浮かび上がり、咆哮するかのよう大きく口を開いた。トリスタンが叫ぶ。

エクスカリバーアアアア。

赤い稲妻が走り抜け雷鳴と地響きが起こった。

トリスタンに食らいつこうとする？黒き竜？の牙をかわし、首の下をかいくぐって、渾身の一撃を袈裟懸けに繰り出し前脚をなぎ払い、ついで、突っ伏した？黒き竜？の頭に剣を突き刺してとどめをさした。

断末魔にもだえる？黒き竜？が動かなくなると、どうにか立って

いたトリスタンが両膝を、がたん、と地面に落として倒れそうになった。いまにも倒れそうな主人を従者ゴルヴナルが、

「トリスタン様」

と叫んで駆け寄り抱きかかえたこのとき、横合いの岩陰から矢が放たれた。従者が倒れ、ために、従者に抱きかかえられた主人も突っ伏した。

何者……な……の……だ？

やがて、矢が放たれた岩陰からか細い騎士が現れ、

これで、イゾルテ王女は俺のものだ。

と立ち上がり高笑いしだした。

第四幕が終わった。興奮して喚声のあがる観客席では、シナモン演じるトリスタンが？黒き竜？に襲われ、力尽きて倒れたあたりで、一緒に卒倒する人々が続出した。調理師の若い夫人もその一人だ。庭師の老夫人は卒倒まではしないが、

「もう、はらはらして心臓がとまりそう。身体に良くないよ」と夫に訴えた。

ジョン少年もつぶやいた。

「しっ、しかし……なんて演技なんだろう　姫様、今年は一段と凄いや」

庭師の老人と調理師の若者もうなづいた。

シナモンたちは楽屋で休憩した。楽屋の通路のところで声がする。

舞台裏にも警察官が配備されており、そこには捜査を指揮している警部がいて、劇場の外で捜査にあたっている部下の警官たちからの報告を受けていたのだった。

「犯行当日は、ジョージ・セシル氏の屋敷には人がいなかったのか？」

「はい、日曜日でジョージ・セシル氏を除く全員が教会の礼拝に出払っていたとのことで、供述は一致しています。被害者は、自宅裏にある船着き場に繋留していたモーター・ボートに乗りこんで、トリストアン島に出かけたようです」

警部は顎あごに手を当てて、

「被害者は犯人と一緒に島に渡ったことになるな……」

「容疑者は、従弟のチャールズ氏とエディック氏、それにモーガン氏とエリー夫人の四人だったよな」

「はい、ジョージ・セシル氏が、レディー・シナモンに財産の大半を譲る旨の遺書を書くまでは、従弟である二氏に相続権があったのですから……。つぎにモーガン氏とエリー夫人は不倫関係にあったようで、邪魔になったジョージセシル氏を殺害したという線も考えられますね」

警部は、何度か軽くうなずいてから、

「使用人老夫妻と一緒に礼拝にいったというエリー夫人は、少なくとも殺害の実行犯からは外れる。すると容疑者は必然的に三人に絞られたというわけだ……」

とつぶやいたところで、ふと横をみると、シナモンが立っていることに気づいた警部は、こほん、と咳払いしてから部下に、

「引き続き捜査を続ける」

と命じ捜査班の警官たちを散開させた。このとき監督の青年がシナモンを呼ぶ声がした。

「はい姫様、第五幕が開幕ですよ！」
シナモンは、一度警部のほうを振り向くと舞台へとむかった。

観客席に男女二人がやってきたのだが、少し遅れてきたため立ち見になってしまった。不倫が噂されるモーガンとエリーである。もっともエリーは昨今、パートナーを失い独身となったので問題はなくなつたわけであるが……。

モーガンが、ハンドバックからオペラグラスを取り出したエリーの耳元にささやいた。

シナモンか……もうこんなに大きくなつたんだね。昔、ジョージに、『シナモンをだっこしていいかい？』ときいたら、ジョージの奴、なんていったと思う？ 『シナモンはいつか私の娘にする。君のような女つたらしにはだっこなんてせない。指一本でも触れてみる。射殺するぞ』ってにらまれたんだ)

それをきいたエリーは、くすり、と笑った。

観客席へ通じる入り口のところには警官が立っていて、不審者が入場していないかチェックしているのだが、いまのところそれらしき人物は見あたらないうつだ。

入り口付近の席に座っていたロレンスがエリーに、
「小用を思い出しましたので席を立ちます、よろしければお掛けください」

といって席を譲ると、一度劇場を出て裏口へと回り込んだ。警官はロレンスを

一瞥いちべつしたが、べつに怪しい様子もないので、また観客席のほうを見

回しはじめた。

やや離れた席には、スコルツェニーとミューラーの二人の姿もあり、出ていくロレンスの姿をみつけるなり、スコルツェニーがほくそ笑んだ。横にいたミューラーは不思議そうに耳打ちしてたずねた。

あれはロレンスだね、スコルツェニー。なにがおかしいの？

いや、さすがだなあって、感心したんだよ。確かにあの位置からだと刺客をみつけにくい。そう舞台の側に回り込むとみつけやすい。

ねえ、スコルツェニー。ひとつきいていい？ ロレンスに情報をくれてやった真意は何？

真意？ 少々ハプニングはあったけれど、僕たちはミッシェンを完了した。これ以上無駄な血を流す必要がないんだよ。

優しい瞳の少年が、ふう、と一息いれてから、

じゃあ、もし、狙われているのがシナモンでなかったら？

とききかえすと、頬傷の少年が悪戯な笑みを浮かべた。

ミューラー、君はいい奴だけれど、ときどきとても意地悪になるのだね。僕にそれをいわせる気がい？

スコルツェニー、君は優しいがときどき？黒き竜？となり、あらゆる人間の運命を指先でもてあそぶ。あのロレンスやシナモンでさえも……。

いったはずだよ、ミューラー。僕はダーウインの『進化論』の信奉者なんだ。人類の頂点に君臨する人 シナモン を僕は愛する。だから存在価値をもたない害虫どもから僕が守るのさ、どんな手を使ってもね。

観客席のもつとも後ろでそのような動きがあったのとは関係なく、第五幕が開かれた。

舞台は、アイルランドの王城である。尊大に胸を張ったいかにも情弱な印象を受ける騎士が謁見の広間にやってきて、片膝をついてこんな口上を述べた。

国王夫妻と王女イゾルテに謁見した騎士は、

「王よ、黒き竜 を倒しました。お約束通りイゾルテ王女を私めにお賜りください」

と申しでた。謁見の広間にいた者たちは、騎士の言葉をきいて誰もが首をひねった。

あやつ、戦場で先陣を切ったことなど一度もなく、さしたる武勲もない。かような者があの？黒き竜？を倒せるものか？

「おや、皆様、私をお疑いのようですね？ 論より証拠、？黒き竜？はアイルランドを脅かさなくなりました。すべては私めが倒したからでございます」

騎士のものいいは役者がかっていた。王女は騎士によい印象がないとみえて、父君にこう進言した。

「父上、その者のいうことが正しいか否かは 黒き竜 の住処を訪ねれば判ること。ただちに斥候を放って、事の真偽をお確かめくだ

「さいませ」

「判った。イゾルテの申す通りだ。真偽を確かめるまでは汝を北の塔で幽閉することにする。誠であれば汝にイゾルテを与え一門として迎え諸侯に列するといしよう。しかし偽りであれば騎士身分を剥奪し国外へ追放する。よいな」

騎士の顔が硬直し、罪人のように衛兵両腕をつかまれ引きずられるように北の塔へ連行されていった。翌日、皆が思ったように騎士の言葉は嘘と判り罰が与えられた。かわって重傷を負ったトリスタンと従者ゴルヴナルの二人が、黒き竜の住処で発見され、国賓として王城に担ぎ込まれてきた。介護をしたのはまたも心優しき王女イゾルテであった。

イゾルテは秘薬を練り二人を献身的に介護した。数日後、どうか口を利くことが出来るようになったトリスタンが王女に告白した。「以前にも私はあなたに救われた。タントリスというのは偽名で、ほんとうの名はトリスタン　コンウォールの騎士トリスタンです」

「トリスタン？ 私の婚約者モルオルトを殺した」
「イゾルテは懐剣を抜いて寝台に横たわるトリスタンを刺そうとしたのだが、トリスタンは静かに死を受け入れようとしていたため、ふっ、と力が抜けたように振り上げた懐剣を降ろした。」

「私はあなたを許さない。けれどもあなたがアイルランドの救世主であることには変わらない。約束は約束、私はあなたの妻となりましょう」

トリスタンはゆっくり首を横に振って、
「私の望みは、イゾルテ王女、あなた様がコンウォールに輿入れし

てくださること。あなた様がわが叔父マルク王に嫁いでくだされば、
アイルランドとの百年にわたる抗争が終結するのです。私が 黒き
竜 を倒しましたのもそのため
と胸の内を正直に語った。

イゾルテはシヨックを隠しきれないではいたが、侍女のいれてく
れたハーブ入りの白湯を飲んで少し落ち着きを取り戻したのだった。
この話しは、アイルランドの国王の耳にも入った。

トリスタンか……老いばれのマルク王にはもつたないない騎
士だ。王女を与えてわが一門衆に加えたいところだが、 黒き竜
に荒らされ疲弊したわが国が、逆にコンウオールに脅かされるとも
限らぬ。この申し出を受けるのは天命というものである。

トリスタンの望みはかなえられ、早速、王女イゾルテは、コンウ
オールに輿入れすることが決まった。

劇場観客席には、殺されたジョージ・セシルの従弟であるチャー
ルズとエディックの姿もあり、エディックが隣の席にいるチャー
ルズの肩を叩き後方を指さした。

「チャールズ、見るよ、モーガンとエリーがいるぜ」
「エリーめ、いい気なものだな。ついこないだまで悲劇のヒロイン
を演じていたくせに、ジョージの喪もあけて間もないというのにモ
ーガンの野郎と夫婦気取りしていやがる」

チャールズがいまいましたげにいい、さらに付け加えた。
「そういえばエディック、ジョージがエリーと結婚するまえは、お

まえ、エリーと付き合っていたんだよなあ」

「おいおい、どういう意味だい？ まさか五年以上も前にエリーをジョージに横取りされた怨恨で僕がジョージを殺したとでもいうのかい？ さっき入り口のところにいる警察官が話していたのをきいたんだがね、ジョージ殺害当日、漁に出ていた漁師が、モーガンとおぼしき男を乗せた蒸気船を目撃しているんだ。真犯人は僕じゃない。奴だね」

「やはりそうか　モーガンだな、犯人は……」

観客席に座る二人の男はほくそ笑んだ。

第3章 男装の麗人（4）

アイルランドからコンウォールにむかう船の上には、トリスタンとイゾルテがいた。

トリスタンは確かに 黒き竜 を倒したアイルランドの救世主ではあるけれども、婚約者モルオトを殺した仇敵。しかも 黒き竜 を倒し自分の妻に迎えるのではなく、叔父に捧げるというのか？ 私は貢ぎ物か？

という疑問がイゾルテに生じた。そのような疑念をもつことはアイルランドのためにならない。ということはイゾルテも知っている。けれども感情が許さないので。イゾルテはついに感余り、船の触先へんけんで豎琴を奏でていたトリスタンの後ろから声をかけた。

「眠れないの。お酒に付き合ってくださいさる？」

「見事な星です。お付き合いましたしょう」

イゾルテがそういつて角杯かくはいを手渡そうとするので、トリスタンは弦を弾じるのをやめて角杯を受け取った。二人は乾杯し飲みほしたところで、イゾルテは勝ち誇ったようにトリスタンにいった。

「ささやかなる私の復讐よ、トリスタン。私の婚約者モルオトを殺し、同じ手で 黒き竜 を倒してアイルランドを救った英雄。あなた一人を黄泉よみには旅立たせない。私もお供するわ」

「毒を盛ったのか？」

イゾルテがうなづいた。しかし二人に感情の変化が現れ、火山爆發のように吹き上げてくる感情を抑えることがかなわず抱擁しあっ

た。二人の背後にはイゾルテ付きの女官が現れた。

お許し下さいませイゾルテ様。そんなことと思い、毒薬と媚薬やくをすり替えておきました。媚薬は王妃様が魔法をかけながらお作りになられたもの。もしマルク王がお好みでなくとも愛するようになれる薬。毒をあおられるくらいならいっそ……。

こうしてトリスタンとイゾルテは禁じられた愛に苦しむ仲となり、そのうえでイゾルテはマルク王の妃となったのである。一行がコンウォールに着くとただちに盛大な婚儀が執り行われ、国中が祝賀に沸きたった。マルク王はイゾルテに親切であった。新妻になにかと配慮をしてくれた。イゾルテはそんなマルク王に感謝し尊敬したのだが、心はトリスタンの虜となってしまうたのである。

そんな二人の仲は公然の秘密となり、ついに、一門衆筆頭のメモート公が口火を切った。

「聡明なる王よ、口にせぬだけで皆が、イゾルテ王妃とトリスタン卿との仲を知らぬ者はおりませぬ。王妃の不貞は国の威信に関わること。王とて見て見ぬふりをなさることは許されませぬ」

「メモート公よ、どうしろというのだ？」

「祭壇を設け、神の臨席のもと、私とトリスタン卿とを決闘をさせてくださいませ。もしトリスタン卿が潔白ならば神はトリスタン卿に勝利を与え、反対に私の申すことが誠ならば神は私に勝利を与えるでありますよう」

翌日にも練兵場のある馬出し郭に祭壇が設けられ、城の貴賓・兵士たちが見守るなか、決闘が執り行われた。マルク王は祭壇に置かれた神剣エクスカリバーを手に取り、

「審判は、太祖アーサー大王の魂魄こんぱくが宿りしエクスカリバーがくだ

すであるう」

と行ってトリスタンに手渡した。

白馬に乗り銀色の甲冑を身にまとったトリスタンに対し、メロート公は黒馬に乗り黒色の甲冑を身にまとっている。太鼓が打ち鳴らされ、決闘はまず飛槍をもつての突撃から始まったが、互いに巧みに飛槍を交わしあったため決着がつかない。次に二人は作法に従い、馬を降り剣での決着に臨んだ。間合いをつめて両者が詰め寄っていく。メロート公が長剣の柄に手を掛け、抜いた。けれどもトリスタンは、

剣が、エクスカリバーが抜けぬ。

と引き抜けずにいたところを、メロート公に袈裟懸けに斬られ突っ伏した。おおっ、と観客席はどようめいた。貴賓席に陣取っていたイゾルテは両手で悲鳴を押さえ、マルク王は双眼に手を当ててから頭を左右に振った。そしてメロート公の言い分に義があることを認めざるを得ない。重傷を負ったトリスタンに対してマルク王はいたわりの言葉をかけた。

「トリスタンよ、愛するわが甥トリスタンよ。おまえを国外追放とせねばならぬ 神剣エクスカリバーをそなたに預ける。神剣エクスカリバーを鞘から抜き放てるようになったときこそ、太祖アーサー大王がおまえの罪を許したときだ」

トリスタンは国外追放となり、従者ゴルヴナル一人を伴い、（現在のフランス北岸で）ブルターニュ半島にある所領に謹慎することになったのだった。

第六幕が開幕した。舞台はブルターニュ半島にある海を臨んだトリスタンの居城である。トリスタンが、一門衆筆頭のメロート公と決闘して敗れ、メロートが剣に塗った毒のため寝室で臥せっているところから始まる。その寝室に従者ゴルヴナルが駆け込んできた。

「とっ、トリスタン様、敵襲です」

「敵襲？ 海賊か？」

「軍旗の紋章から、メロート公の手勢兵士一千のようです」

「メロート公？ いまさら何ゆえに攻めてくるというのだ？」

トリスタン領内から兵士をかき集めると三百ほどにはなるのだが、寝込みを襲われた形で、城に詰めている兵士は五十名を下回っている。城を取り囲んだ敵兵は、舟に積んでいた攻城用の車両を組み立て、城門をぶち破って内部へ突入したのだった。

ここだつ。扉を斧で砕いてしまえ！

扉の前に家具を積んでバリケードにしたのだが敵兵突入は時間の問題だ。汗埃と血糊で甲冑の汚れたトリスタンの近習十名が、主君と命運をともにすべく最後の戦闘に備えた。病いで立ち上がることのできないトリスタンは、矢をセットしたいくつかの石弓を手元に置き、枕元には叔父から預けられていた神剣エクスカリバーを置いている。

勇者トリスタンを仕留めたる者は、末代までの語りぐさじゃ！

ついに扉は破られ、バリケードが除かれ、敵兵が突入してきた。トリスタンの近習たちは勇敢に応戦するのだが衆寡敵せず、一人また一人と敵兵に討たれていく。トリスタンもあらかじめセットして

いた石弓の矢を使い果たしてしまった。

最後に残ったのは従者ゴルヴナルだけで、主君の寝台の横で、詰め寄る狼のような敵兵の群れを長槍で威嚇するのがやっとであった。その従者ゴルヴナルも敵兵が放った弓矢で石畳に突っ伏した。

はやる兵士たちを制し、群れを割って、宿敵メロート公が姿を現し、大胆にも半身を起こしているトリスタンの寝台の端にどっかと座った。

トリスタンは、メロート公を正視して問いただした。

「何が目的だ？ 私の領地を占領しても叔父上が領有など許すまい」

「なるほど卿は、躬との決闘に敗れ国外追放処分となった。されどコンウォール王家継承の証し神剣エクスカリバーを手にしている。マルク王とイゾルテ王妃の間には相変わらず子がいない。不遜ながらマルク王は老い先短い……判るだろう、トリスタン？」

「理屈は通っているな。しかしそれだけではあるまい？」

トリスタンがまた問うとメロート公が嘲笑した。メロート公は、言葉ではない、心に直接トリスタンに語りかけてきたのだった。

賢いなトリスタン、汝に最後のチャンス^{なんじ}をくれてやろう。

？黒き竜？か！

そうだ。吾はもともとを实体をもたず、人の心の？闇？を渡り歩く。アイルランドの洞窟にいたのは、彼の国の者どもが？闇？をイメージした幻、私自身は不滅の存在だ。

ではメロートは？

ああ、こやつか？ 吾は、愚かなメロートの？ 闇？に同調しこやつの身体を乗っ取った。ふん……こやつは自らがコンウォール王になりたかったのよ。次々と武勲をたてていきマルク王の寵愛めでたい汝が妬ましかつただけの浅ましき男。

メロート公の身体を乗っ取った？ 黒き竜？が、あげた自らの片腕を一瞥した。

シナモン警護のため舞台裏に詰めているレザー警部たちの前にウエルズからきた男が現れた。

「はじめまして、レザー警部」

「どこかで見えた顔だ？」

制服警官の一人が警部に耳打ちした。

えっ、あの アラビアのロレンス か！

握手を済ますと青灰色の瞳をした男はぶしつけに警部にきいた。

「刺客とおぼしき人物は割り出しましたか？」

「不審な人物はおりませんな。入り口に見張りを置いてチエツクさせてましたのでね」

ロレンスは入り口から、そっと、シナモンたち役者陣のそろう舞台を見回し、そして客席をながめた。

「刺客は大柄な男だとは限らないし、変装しているときもある。たとえば舞台前列中央にいるあの老婆の格好はやや違和感がある」

まつ、まさか、あんな前に。部下たちを配備していない。あそこから拳銃で狙撃されたら間に合わない。

警部は慌てて、数名の部下を呼んで劇場全体に配備させていた警官たちに伝えに走らせた。劇場観客席はスポットライトに照らされる前列付近を除いては全体に暗い。ロレンスは今いる位置から劇場奥の高い席にいるスコルツェニーをみることはかなわれないが、存在を感じる事ができた。

トリスタンはまた問うた。

？黒き竜？よ、おまえの狙いは、哀れなメロート公のように、私の身体を欲しているのだな？

そうだ。汝の無様ないまの状態としては最高の条件だとは思わないかね、トリスタン？ あらゆる生物は、おのが子孫を残すため、ライバルとなる種族を蹴落とし滅亡させ、進化を遂げてきた。人類として例外ではない。人類が発明した文明とは炎だ。道具としての炎を得るために森林樹木を伐採し都市を築いてきた。なにゆえに？ ？欲望？のためにだ。？欲望？とは善だ。進化の頂点を目指す？欲望？に逆らうことこそが悪なのだ。そう、悪とは愚か者のことをいうものだとは思わないかね、トリスタン？

トリスタンは激しく左右に首を振った。

それは禽獣きんじゅうの理屈だ。人には、人類には、？理性？というものがある。私は過ちを犯し甘んじて罰を受けているのは、私が人で

あるからだ。人が歩ゆめば罪をつくる、人は自らの罪を償いながら進化するのだ。少なくとも私はそうありたい。

残念だよトリスタン、汝とは仲良くなれると信じていたのだがね……。

メロート公の身体を乗っ取った？黒き竜？が、双眼から涙を流し手にした剣を、深々とトリスタンの腹に突き刺した。トリスタンは相手の剣をつかんでたぐり寄せ、枕の後ろに隠したエクスカリバーの柄を握った。

私は人だ。太祖アーサー大王よ、私は？理性？を正義と信ずる。？欲望？か？理性？か答えられよ、大王。

トリスタンが手にした長剣の鞘がするりと床に落ちた。

エクスカリバアアアアアアアアアアアッ。

剣身に？赤き竜？の頭部が映り、それが赤い稲妻の閃光とともにメロート公の背中から深々と突き刺さっていった。メロート公は、？黒き竜？に姿を変え、何度も咆哮をあげながら石畳をのたうち回りついに果てた。

ちょうどそのとき、マルク王の軍勢が、あっけない主君の死で狼狽しているメロート公の軍勢を蹴散らしてトリスタンの寝室に入ってきた。

「トリスタン、愛するわが甥よ。どこだ！」

そういつてトリスタンの亡骸をみつけたマルク王が、亡骸を抱いて天を仰いだ。しばらくしてイズルテが部屋に駆け込んできた。イズルテが狂ったように、

「トリスタン。マルク王がすべてをお許しなられたのに　王は私と離縁してあなたと結婚することをお許しになられたのよ」

と叫ぶと懐剣で自らの喉を刺して床に屈した。

「なんとということ……」

イゾルテに駆け寄ったマルク王は愛する者のことごとくを失って一人となり、部屋の中央で呆然と立ちすくんだ。

伯爵夫妻と並んで貴賓席に座っていたアーネスト・サトウが、

ふう、無事に舞台が終わった。

と安堵して拍手を送ると、続いて他の客たちが喝采をいだした。泣いている客もいる。このとき喝采を送る客で客席最前列に座っていた老婆が、ハンドバックに隠し持っていた拳銃を取り出し舞台にいるシナモンに向けて立ち上がった。ロレンスが指摘した老婆に変装した刺客だ。

第3章 男装の麗人(5)

老婆に変装した刺客が手にしているのは大型拳銃で、刺客は口元に笑みを浮かべていた。対抗するかのように、寝台に半身を起こしていたシナモンは枕の下から、手のひらサイズの拳銃を刺客にむけた。

刺客の手にしているのは、リボルバー式のアメリカ軍用拳銃？コルトM一九一七？で、全長二七三ミリ、重量約一〇〇〇グラム、装弾数六発となっている。対するシナモンが手にしている拳銃は、同じくアメリカ製護身用拳銃？レミントン・デリンジャー？で、全長一二四ミリ、重量三二二グラム、装弾数二発となっている。

だめっ、撃てない。

シナモンは引き金を引こうとするのだが、どうにも指が動かなかった。

刺客はせせら笑った。

「デリンジャーは見かけが愛らしく手のひらにも収まるが、安全装置がないぶん引き金が重たいんだよ。お嬢ちゃんの可愛い指じゃ引けないようになってるのさ。しかもちよつと離れると命中精度が悪くなるときている。そしてなによりも 初めて人に銃を向けた者は七割が撃てない」という統計まである」

刺客がゆっくり引き金を引き出した。瞬間、レザー警部が捨て身で舞台に飛び込んでシナモンに覆い被さった。

伏せるっ、テロリストだ！

観客たちは、声の勢いに圧倒されて全員、いわれるまま伏せた。

ダーン……。

撃たれたのは刺客のほうで観客席下の床にもがいている姿がみえる。劇場の縁辺に配備されていた制服警官たちが変装した刺客を取り押さえた。急所は外れているらしい。寝台にいたレザー警部は刺客を一瞥してから起きあがった。十三歳の少女が、恐怖と自分の無力さに泣いていると、青灰色の瞳をした人が歩いてきた。

「シナモン、君がそんなものを持たなくていいんだよ。そしてこれからも必要ない」

ロレンスの言葉に厳しさはないが、シナモンにはずっしりと堪え^{こた}たようだった。

青灰色の瞳をした人、トーマス・エドワード・ロレンスは？ルガーP〇八？拳銃を懐中に収めた。？ルガーP〇八？は、トグル作動式で、全長二二二ミリ、重量八七〇グラム、装弾数八発となっている。本来はドイツ製だが、イギリスでは模造品もある。ロレンスの拳銃は捕虜から没収した戦利品である。

？ルガーP〇八？はデリケートな拳銃で、戦場では砂をかんだりすると故障もしやすかったが、至近距離での戦闘には抜群の性能を發揮して？ルガー神話？を築いておりイギリス兵にも人気が高かったといわれている。

貴賓席の伯爵夫妻、アーネスト・サトウ、それに一般席にいたりザード城の住人たちも血相を変えて舞台に駆け上がってきた。

アーネスト・サトウが、ロレンスをみつけて、

「久しぶりだね、ロレンス君　レディー・シナモンを助けてくれてありがとう……私からも礼をいわせてもらおうよ」
と声をかけた。

他方で、舞台裏から軍人たちもやってきた。

「ロレンス中佐ですね。チャールズ閣下から、あなたに直接お渡しするようにと命じられてうかがいました……」

ロレンスは、差出人を確かめると無造作にポケットに押し込み、観客席の奥に座っていたはずのスコルツエニーのほうを見やったが見ることはむろん、存在を感じることもすらかなわなかった。

姫様が　伯爵家と親交のあるアーネスト卿が、日本駐在英国公使であつたところに訪れた群馬県にあるいくつかの古墳をぜひ訪ねてみたい　とおっしゃられたので、私、スイーツマン・ウルフレザーは、新しく現地で雇つた執事ドロシー・ブレイヤーを姫様の随員に加えて、上野駅から高崎駅にむかう列車に乗った。アーネスト卿が訪れたという古墳は前橋にあり、前橋に行くには高崎から乗り換える必要があつた。

アメリカでのドロシー・ブレイヤーの専攻はガラス工芸史だった。古墳からはガラス製品も出土することがあり興味を示していた。ややお喋りではあるけれど不快ではない。楽しいお嬢さんだ。ブレイヤーは姫様と車中ではこんな話をなされていた。

「姫様は、平泉の中尊寺をご存じですか？」

「中尊寺？」

「東北地方の古い寺院です。東北地方はイングランドでいえばスコットランドかウエールズ、あるいはコンウォールといったところでしょうか？」

「ブレイヤー執事は、東北が日本におけるケルトのようなものとお考えなのですね？」

姫様がそうおっしゃられると、人差し指を天井にむけて、「もちろん」と微笑んだ。そしてこんなふうが続けたのだった。

「中尊寺には、一振りの刀が伝わっています。八世紀ごろ、アテルイと呼ばれる原住民である蝦夷えみしの王の佩刀はいとうが収められていました。これを所有する者が東北の支配者であったのです」

「まるで、アーサー王とエクスカリバーの関係のようですね」

「アテルイ自体は、天皇ミカドが派遣した軍勢により攻め滅ぼされましたけれど、のちの十世紀に東北の支配権を確立した藤原秀衡ふじわらひでひらは、証としてアテルイの刀を継承したのです。十六世紀から十七世紀の伊達政宗もしかりです」

群馬県に君臨していた毛野公けののみみは皇統を引き、代々將軍として、東北や朝鮮半島の攻略を指揮した。九世紀ごろの毛野公は、蝦夷勢力にこてんぱんにやられたらしい。要塞を囲まれ防戦し矢が尽きたとき、夫人が侍女と一緒に琴をならして弓の音をまねたところ、蝦夷たちは攻略をあきらめて撤退したという記述を何かの本で読んだことがある。姫様がそんなことをおっしゃっていた。

いにしえの刀剣には、不思議な力を秘めたものがあるらしい。姫様はドロシー・ブレイヤーの話に釘付けとなっておられた。

その日、私たちは高崎郊外にある旅館錦山荘に宿泊し、翌日、前橋市を訪れることにした。

『リザード伯爵家家宰スイーツマン・ウルフレザーの日記』

ふたたび、榛名山山麓相馬ヶ原演習場である。

十メートルはある塔のような岩の塊を、拳銃の弾丸一発で吹き飛ばした金属粉の威力に一同は驚いた。

カール・ハウスホファー教授がつぶやくようにいった。

岐山わかやまの剣、……かつて周の武王が、岐山に落ちた隕石をみつ

けて
瑞兆とした。やがて武王は、悪政を敷く殷王朝を倒し、周王朝を開いた……という記述が古い歴史書にあるそうだ。

ミューラーが少し興奮気味に教授に訊いた。

「それで岐山の隕石のその後は？」

剣に鍛えられて、歴代王朝に引き継がれたそうだ。清朝の太宗の子孫である肅親王の一族は大功から特別に剣の一部を与えられたのだという。

川島芳子はうなづいた。

ミューラーがスコルツェニーの顔を見て、

「すごいよ、スコルツェニー、この粉末をいくつかの物質と調合し、爆弾に少量加えるだけで、絶大な威力を発揮するんだね！」

はしゃいぐようにいうと、拳銃をポシエツトに収めたスコルツェニーが冷めた様子で笑った。

「粉末は剣一振りぶんしかない。数度の戦闘には勝てるだろうけれど、第一次大戦のような長期戦となったら、効果はいかほどのものかな？」

川島芳子は男まさりながら、反面とても繊細なところもある。ス
コルツェニーの反応はプライドを傷つけたようである。それをみた
博士博士は幼子をあやすかのように、こう付け加えた。

「岐山の剣は、鉄の塊でできた隕石 隕鉄 を削って鍛えたものだ。
最近おもしろい仮説の発表があつてね。 およそ三千年前に、小

惑星が地球にアジア極東に落下して、舞い上がった気候の大変動を
おこしていくつかの文明を滅ぼした。その際、空中でいくつにも割れ
た鉄の塊が、中国、シベリア、朝鮮、そして日本に落下した。

その鉄の塊には、？反物質？とよばれるものが少量まざっていたと
いうのだよ。仮説では小惑星？岐山？としている」

ほう、小惑星？岐山？ですか。？反物質？鉍脈を掘り当てれ
ば、人類史に革命を引き起こしますね。

頬に傷を持ちながらもなお秀麗な青年がはにかんだ。

上野駅から高崎駅行きの列車に飛び乗った雑誌『東京倶楽部』の
記者とカメラマンである佐藤と中居は、高崎駅から前橋行きに乗り
換えた。途中、ホームで駅弁？たかべん？の売り子から、おにぎり
とお茶を買い、車内でかきこむように食べた。

機関車は国産のC51型である。C51型登場以前は外国から購
入することが多かったが、「SL黄金時代」と呼ばれるその頃から
国産機関車が量産されていた。列車は左手に夕陽に映える観音山丘
陵を眺めながら前橋へと走っていく。

「先輩、姫様 近くにいますね……」

「……………」

握り飯を片手に中居は、佐藤の胸に手を当ててみた。

ドクンドクン……。……。

「すげーっ、先輩の心臓すげーっ！」

前橋駅に着いた頃には陽が落ちていた。二人は市電に乗り換え宿泊を予定している油屋旅館にむかった。油屋旅館はどこにでもある普通の旅館であるが、昔日、外交官サー・アーネスト・サトウが宿泊し、ここを基地にして群馬県の古墳調査をしたことで名前が知られている。

姫様もここに宿泊するはずに違いない。

と佐藤は考えていた。

宿の番頭にシナモンの所在をきくと、

「来ていない」

と答えた。番頭の言葉に二人は顔を見合わせ慌てた。

「やっべーっ。これじゃすれ違いですよ、先輩」

「姫様のことだ、きつと、明日また古墳を見に行かれるだろう」

「そおつすね、先輩。もう遅くなりましたし、予定通り今夜はここに泊まることにしましょう」

二人は、女将に部屋に通された。料理とエビスビールを注文してから浴衣に着替え、待つ間に、大使館で借りた資料を通した。

「姫様の『トリスタンとイゾルテ』、観てみたかったなあ。姫様が、宝塚とか松竹とかの歌劇団で公演したら、スーパースター間違いなしですわねきつと……………」

「なにをいいだすかと思えば中居　当然だ」

中居がそこで、佐藤が開いたファイルに目をやった。

「しっかし先輩　飛行船じゃ、ただ可愛いただけじゃなくて凜りんとしたところがありましたか、こういうところからきてるんですね、姫様って。えらい修羅場をくぐり抜けてきたんだあ……十三歳ですよ」

「しっ、刺客の野郎、俺の姫様に銃口を向けるたあ八つ裂きにしてやるーっ……スコルツェニーの野郎も何考えているんだあっ！」

「どーっどーっどーっ、先輩　五年前のことですから……ファイルを投げ飛ばさないください。大使館の人に怒られちゃいますよ」

そこへ、ビール六本を収めた把手つきの木箱を手にした女将が入ってきたので、佐藤は、こほん、と咳払いをしてからファイルを卓上に置いた。女将は、

「すぐ、お料理のほうもお持ちいたしますからね」

と行って退室の際に、くすり、と笑った。

第4章（終章） ウバ・ティー1

リザード祭りが終わった翌日は、穏やかな夏の午後四時のこと、海に臨んだ断崖にたたずむリザード城の庭において伯爵夫妻主催である恒例のティーパーティーが催される。日頃から庭師の老人が丹念に手入れをしている庭には、色とりどりの花々が咲き乱れており訪れた来賓を楽しませ、庭の中央にはその人たちをもてなすため大きなテーブルがいくつも並べられていた。

来賓には町の名士のほかに、今回の事件に関わった人々も招かれていた。主賓であるアーネスト・サトウ、T・E・ロレンス、捜査に携わったレザー警部、駐在の巡査、祭りの実行委員であるリザード商工会の青年、そして殺害されたジョージ・セシルの親族・友人であるエリー夫人、チャールズ、エディック、モーガンの姿もあった。会場の人々は盛装している。裏方には、庭師と調理師の夫妻と庭師の少年ジョンが大忙しで、サンドイッチやらスコーンを載せたケーキケースを運んでいる。

伯爵の祝辞が述べられ催しは和やかに進み、来客たちは自慢の隠し芸を披露しだした。でっぷりと肥った市長のシルクハットから鳩をだす手品、警察署長夫妻のマンデリンとフラメンコ、商工会の青年の玉乗り……会場は拍手と歓声に包まれた。

隠し芸のとりとなったのはシナモンであった。アーネスト・サトウとロレンスは、十三歳の少女に順番が回ってきたとき、少女がさりげなくレザー警部に目配せをしたのを察した。駐在の巡査は、そんな少女の目配せには気がつかず、隣にいたレザー警部に話しかけた。

「町中の人たちがみんないうんですよ、『レディー・シナモンの紅茶占いはよく当たる』って……」

「ほう、それは楽しみだ」

司会役のアーネスト・サトウが、シナモンを紹介した。

「ご来賓の皆様、次に演じますのは皆様ご存じ伯爵のご息女でありますレディー・シナモン 演じますのは紅茶占いです……」

「ご紹介いただきました私は、ザ・ライト・オノラブル・レディー・シナモン・セシル・オブ・リザードです……」

レディー・シナモン……ついこないだまで愛らしいお子様だったのに、かくも美しく成長なされた。この方は成長すればするほど、風の妖精シルフィーのように優雅になられていく。

その人がスカート先端を軽くつまんで会釈すると、会場が軽くどよめき、すぐに静かになった。

「本日の紅茶はウバです。ご承知のようにセイロン産ウバ・ティーは、銀ポットから湯煙をあげティーカップに注がれたとき、薔薇のように鮮やかな紅色の液体に、黄金の輪 ゴールデンリング を浮かばせるのです。 ゴールデンリング で連想されるものは エンゲージリング そう、結婚指輪ですね」

シナモンの瞳が一瞬、モーガンの横にいたエリー夫人に向けられた。女性客たちの視線が一斉に左手薬指にむけられ、儂げな未亡人の視線も同じように左手薬指にむけられた。

ロレンスが隣にいたアーネスト・サトウにいった。

「ウバですか 僕は中近東での生活が長く、茶といえばトルコの

チャイ ばかり飲んでいましたよ」

セイロン（現スリランカ）産のウバは、花のような甘み、芳醇でスパイシーな渋み、口にしたときにかすかに漂うメントール香のよ
うな味わいが特徴で、インドのダージリンや中国の祁門キマンに並ぶ世界
三大銘茶と賞賛される。

ロレンスの父は准男爵トーマス・ロバート・タイ・チャップマン、
母はセアラ・ロレンスといって准男爵家の娘たちの家庭教師だった。
やがてトーマスとセアラは不倫関係になり、ウェールズに駆け落ち
し、以後一家はセアラのロレンス姓を名乗ることになる。両者の間
にできた私生児は五人おり、すべて男子であった。

厳格なクリスチャンの家に育った母セアラは負い目を感じて精神
に均等を欠くところがあり、兄弟を虐待したためロレンスは、母親
を半ば憎んでいたのだが、子供の頃にそんな母親がときどきいれて
くれたミルクたっぷりのウバ・ティーをふと思いだした。

シナモンは言葉を続けた。

「……古の人々は、左手薬指は心臓に直結する部分と信じていまし
た。心臓は天界に住まわれる神様に直結いたします。ゆえに結婚指
輪リングを左手薬指にするという事は、新郎新婦が神様に、『この人と
一生添い遂げます』と約束した証しなのです」

そういつてから、

「では皆様、ティーカップの紅茶を飲みほして戴けますか？ 残っ
たお茶の葉の数と形で占ってさし上げましょう」

といって来賓の人々に声をかけていく。まずは市長夫妻のところ
にいき、

「おや、葉の形が丸くて可愛いですね。近くお孫さんが生まれるのでは？」

「ええっ、どうしてわかるの？ 来月の予定ですよ」

警察署長夫妻のところでは、

「明日、釣りに行かれますね？ 大物が釣れますよ」

署長夫人が亭主の背中を思い切り叩いて、

「姫様が保証してくださったわよ、あなた。さあ、しっかり釣ってきて頂戴、明日はバターとガーリックのきいたソテーですからね」といって笑った。やがて十三歳の少女がエリーたちのところへやってきた。

「なんだか怖いわ。昔からあなたの紅茶占いは外れたことがないのですもの……」

シナモンは神妙な顔をして、エリーが飲みほしたティーカップの底をのぞき込んだ。ティーカップの底にある葉は羽のように二つ重ねられている。

「これは 守護天使の羽 おば様、あなたのそばに片時も離れず守っていてくださる方がいらっしやる……」

笑みを浮かべていたモーガンが、エリーの困惑した様子に複雑な顔をした。

第4章（終章） ウバ・ティール2

シナモンは、エリーの近くにいたチャールズのカップをのぞいた。「小さく舟形に並んだ葉が、やや大きな丸い葉に隠れています。三艘の舟が隠れる洞穴ほらあなを意味しています」

チャールズの顔色が変わった。続いて、エディックのカップをのぞく。

「鷲と獅子が相対したような葉の形。古来から鷲と獅子は対峙する者同士といわれ、嫉妬を意味します」

チャールズも顔色を変えた。そして最後に、モーガンのカップをのぞきこんだ。

「二枚の葉が、ファイルを開いた形になっていますね」

モーガンも驚きを無理に隠しているのが誰の目にも明らかだった。そこへ駐在の若い巡査をともなったレザー警部がきて、アーネスト・サトウとロレンスの二人も続いてきた。レザー警部が割り込むようにこう告げた、

「チャールズさん、エディックさん、それにモーガンさん。失礼ながらお三方は、今回の連続殺人事件の容疑者となっています。お三方のうち一人が、ジョージ・セシル氏と灯台守を殺し、さらに刺客を雇ってレディー・シナモンの命を狙ったのです。レディー・シナモンは優しい娘さんだ……私が逮捕する前に、自首するようにはからっているのです。さあ今ならまだ間に合いますよ、自首してくださいな」

肥ったエディックは、

「ふんっ、子供の浅知恵、茶番だ。考えてもみろ、ジョージを殺して得るのは動機からして、エリーと不倫しているモーガンに決まっているだろ」

と吐き捨てるようにいった。そこでレザー警部が口を挟んだ。

「レディー・シナモン、昨日、劇場で話してくれたことを皆にも説明しておやりなさい」

シナモンはうなづいて謎解きを始めた。

「二つの殺人事件を結ぶストーリーはとてもシンプルです　表面的にはですけど……」

ジョージ・セシルは、コンウォール地方の大地主であったが、ロンドンに本社を構える証券会社の株主で役員でもあった。この人は近年、オーストリアのウィーンにある支店長として経営にも携わっていた。当然、ジョージは家を不在にしがちで奥方であるエリーは寂しい思いをしていた。そんなとき、同じ証券会社の役員であるモーガンが、エリーに言い寄ってきて、二人は禁じられた仲となった。ジョージは滞在先のウィーンで、人づてに妻の不貞を知り帰国することになった。

だがジョージの帰国方法が奇怪であった。列車を使ってフランスに行き、ドーバー海峡を渡ればいいものを、わざわざドナウ川を下って黒海に下り、そこから小さな貨物船で、リザード港に入ったのだ。これではまるで密航だ。さらにジョージの不可解な行動は続く。

ジョージは帰国した翌日、「釣りに行く」といって、一人でリザード川の船着き場から、モーター・ボートでトリスタン島へ向かい、そこで何者かに後から撲殺された　撲殺された瞬間は、庭師の孫ジョン少年が目撃している……。

第4章 (終章) ウバ・テイー3

シナモンは声のトーンを落として、容疑者の一人であるモーガンにいった。

「なにゆえにジョージおじ様は、モーター・ボートを島に上陸させる必要があったのでしょうか？」

それは本来、おじ様が、書斎の本棚に収めていたファイルを、どなたかに渡すためだったにほかなりません…… おじ様がファイルを渡そうとしたお相手はモーガンさん、あなたですね？」

「さすがだね、シナモン、ばれてしまっちゃ仕方ないな」

モーガンは不遜な態度で笑った。

チャールズとエディックが、(それみたことか!)という顔をした。シナモンは悲しげに目を伏せて二人にいった。

「ではなぜ、灯台守のおじさんが殺されたのでしょうか？」

「そんなこと知るか！」

チャールズとエディックが口を尖らせた。

「チャールズおじ様は、投機に失敗して莫大な借金がおありですね？」

「つつ、つまらん噂だ」

チャールズは明らかに動揺している。シナモンは続けた。

灯台守には病気で入院中のお孫さんがおり、かさむ治療費のために頭を悩ませていた。そしてチャールズおじ様が借金で悩んでいることを灯台守が、どこからかきつけ、こっぴどくつけた。

あんたの従兄ジョージ・セシルを殺せばよいではないかね。
ジョージ・セシルには子供がいない。あとは未亡人のエリーを始末すれば莫大な遺産が転がり込む。わしが住んでいる灯台からは何でもみえる。ジョージ・セシルがいきつけにしている釣りのポイントとかもね。何時になったらどこにいますとか細かいことまで知っているのさ。手を貸してやるよ。

灯台守にそそのかされたチャールズは、ジョージ・セシルがトリスタン島に上陸するのを先回りして待ち伏せし、島の断崖に立っていたその人の後から棍棒で撲殺した。

シナモンの話しをきいていたチャールズは嘲笑した。

「それじゃ、ジョージが私に島にすることをあらかじめ知っていたことになる。それに、きいたよ 君のところの使用人の子供が、犯行の瞬間を望遠鏡でみてしまったんだろ？ すぐさま駐在の巡査とトリスタン島に渡ったけれども、犯人もいなければ死体もなかったそうだね……。しかも、かもめ岬にいた君たちはトリスタン島から出ていく舟の存在をみつけることもなかった。そのことはどう説明するんだね？」

シナモンが横にいたレザー警部に目配せをすると、警部は少女に粘板岩の小石を渡した。

「これは粘板岩といって海底の泥が圧縮されてできる固い堆積岩です。リザード付近にある小島や岩礁は粘板岩で形成されているのです。私がこれが重要な鍵となることに気づいたのはジョージおじ様の葬儀の直後でした。モーターボートの縁にはついたばかりの新しい傷とそこに食い込んだ粘板岩の細片、船底にはこの小石があった。つまり、モーターボートは粘板岩でできた低い天井をすり抜けていった……。ことを意味します」

シナモンが左手に小石をかけた、その下を舟に見立てた右手で動かした。

「昔から噂で トリスタン島には洞穴ほらながあるということを書いています。洞穴は普段は水没しているか、入り口天井部のところだけわずかに海面上に開いているのですけれども満潮になると入り口は水面下に隠れてしまう。ただし洞窟内部は広くて小舟であれば、満潮干潮に限らず数艘隠しておくことができる大きな空間になっている というものです」

「ばかばかしい妄想だ。なにを根拠に……」

チャールズは明らかに狼狽している。レザー警部がまた口を挟んだ。

「劇場でレディー・シナモンにいわれて、なるほどと思った私は、部下に命じてトリスタン島を調べさせてみたところ、レディー・シナモンのいわれるように、海面すれすれで開口している洞窟は確かにありました。縁が傷ついて粘板岩細片が食い込んでいる舟は、三艘ありました」

警部が、にやり、と笑った。

「一艘は自宅裏の波止場に停泊しているジョージ・セシルのもの、二艘めは時化しばで偶然打ち上げられた灯台守のもの、そして三艘めはチャールズさん、あなたのものだ」

「……」

チャールズは押し黙った。シナモンが話しを続けた。

「洞窟に隠れて、ジョージおじ様を待ち伏せし殺害したあなたは、

再びボートに乗り込みおじさまのボートをロープで結わえて曳航し洞窟に隠れ、夜になるのを待った。偶然殺人を目撃したジョンと話しをきいた巡査たちが島に上陸したときは夕方、あなたは洞窟に潜んでいた」

入り口の低い洞窟への出入り口にこすれた傷でボート二艘は船縁に引つ掻いたような傷をつくり粘板岩の碎塵が傷口に入り込んだのだ。用心深いチャールズは人目につかないように、夜を待って、洞窟をでた。チャールズは、捜査を攪乱する目的でジョージ・セシル邸裏の船着き場まで、被害者のモーターボートを曳航して行こうとしたのだ。そこでカンテラを照らしたボートが近寄ってきた。乗っているのは灯台守だ。

「チャールズの旦那、さあ、約束だ。アドバイス料と口止め料をあわせた金をくれよ。それからジョージのファイルもな」

「判った。金は準備してある。ただファイルは何冊もあってけっこう重い。舟を寄せてそっちへ移すのを手伝ってくれ」

チャールズはそういうと、灯台守がいわれるまま船を寄せてきて乗り移ってきた。問題のファイルはジュラルミンの箱に収められていて、ずっしりと重く、蓋を開けて何冊かずつに分けて持ち出さねばならなかった。

箱からファイル数冊を取り出し抱え込んだ灯台守が自分のボートに乗り移ったとき、チャールズは隠し持っていたナイフを灯台守の背に突き刺し殺害した。灯台守はしばらくもだえて、ボートに横になる格好で息絶えた。それが波で揺られているうちに仰向けになった。もちろんナイフは仰向けになった拍子に外れている。

チャールズはまだいい逃れしていた。

「ファイル？ なんのことだ？」

そんなチャールズのところ、ロレンスが近寄ってきて

「チャールズさん、僕は軍部からの特命を受けて、デボン・コンウォール警察から、この連続殺人事件の捜査を引き継ぐことになった。僕が特命を受けるということは、どういことかお判りでしょうか？もちろん、これから先の尋問は警察流ではありませんし、弁護士の立ち会いもありません」

あのファイル、国家機密だったのか！

チャールズは青ざめた。チャールズを捕縛したのは警官ではなく、庭園の隅に控えていた屈強な軍人たちだった。

エディックのしたことも違法行為であり、そちらの取り調べに関してはロレンスはレザー警部に任せることにした。

レザー警部がロレンスに、

「レディー・シナモンを殺害しようとしたあの刺客、あっさりど、殺人依頼をしたのがチャールズであることを自供しましたよ」

といった。ロレンスの横にいたアーネスト・サトウは、エリーのところに行きこう告げた。

「エリーさん、シナモンは、ジョージ・セシル氏からの遺産相続を放棄するそうです。亡くなられたご主人、大したものです。シナモンを遺産相続人することによって、あなたを守りきったも……もし弁護士がきたとき、シナモンがチャールズのいる前で、遺産相続を拒否していたら、あなた自身の生命が危なかった」

エリーの双眼から涙が溢れだした。

ジョージ。私はなんとということをしていたのでしょう。出会ったときから私はあなたに守られていた。突然、馬が暴れて御者が振り落とされた馬車、狩りにでていたあなたが見つけて、走る自分の馬から馬車に飛び移り馬車をとめてくれた……そして死んでからもシナモンを通じて、私を守ってくれていたのですね。

モーガンは泣き崩れるエリーに、差し伸べようとした手を引つ込め、

ジョージ・セシル、案外しみつたれだ 『トリスタンとイゾルテ』のマルク王のように気前よく僕にイゾルテはくれなかったな。いや、僕はトリスタンじゃない。ただのピエロだ……シナモンこそ、ほんとうのトリスタンだよ。

そうばやいといると、ロレンスが、

「モーガン、規則違反かもしれないが、サー・アーネスト・サトウとレザー警部には真実を話して差し上げる必要があると思うのだが……」

「ああ、任せるよ、ロレンス で、シナモンには？」

「シナモンは大人びてはいてもまだ子供、ここから先は厄介な大人の問題だ。足を踏み入れない方がいい」

モーガンは首を引つ込めて片目を閉じてみせた。

シナモンがエリーのそばに行つて声をかけている間に男たちは城を抜け出して、港に臨んだ倉庫に入つていった。一行かくるやいなやロレンスの部下である軍人たちが準備していた映写機を回し始めた。ロレンスがスクリーンを指さした。

あれが、われらの祖国イギリスの敵となる男。政権中枢部の大半は、友達だと勘違いしている。気づいているのはウイストン・チャーチル閣下と一握りの人たちだけです。

映写機のなかの人物は、口髭をはやし、大衆の前で演説をしていた。聴衆の中には女性も多く興奮した若い女性の中には失神している人もいた。口髭の男の演説は論理的で、しかも音楽的で、ゼスチャーがはいれば劇的にさえなり、人々を陶醉させていた。

その言葉の中には、

「わがドイツ民族は、ダーウインの『進化論』でいうところの頂点にいる人種だ。自然界は弱肉強食。弱い種は淘汰されるべき者なのだ……」

という一節があった。

アーネスト・サトウは、シナモンの演じた『トリスタンとイゾルテ』に登場し、主人公トリスタンを誘惑し続けた、黒き竜を思い出し、スコルツェニー少年の顔が浮かんだのだった。

第4章（終章） ウバ・テイー4

スクリーンに映し出された人物についてロレンスが補説した。

「レザー警部はまだご存じないかもしれないが、サー・アーネスト・サトウ、元外交官でいらっしやるあなたなら、この男の危険性は理解していらっしやるでしょう。アドルフ・ヒトラー、もともとはオーストリー人です……首相と多くの閣僚たちは、ヒトラーが反共を唱っていることから、ロシア革命で共産党が政権を握ったソビエト連邦に対する防波堤として利用できると考えています」

レザー警部は目を見張った。

「ヒトラーと今回の事件との因果関係は」

警部からの質問には、ロレンスに代わってモーガンが答えた。

「ジョージ・セシルは、リザードの大地主という顔のほかに、ロンドンに本店をもつ証券会社の役員という顔もあるのはご承知ですね。そうです、ここまでくれば察しがつくでしょう。彼は諜報機関の間だったわけですよ。ウイーンでかき集めたヒトラー関連の膨大な資料をせつせとリザードの自宅に送っていて、僕が仲介してロンドンに運んでいた……ところが、敵が勘づいて妨害してきたというわけです」

「そうか、資料というのが、レディー・シナモンがいつていたファイルで、受け渡し場所がトリスタン島だったというわけですね！それならば、故ジョージ・セシル氏が、鉄道路線をつかったフランス経由の直線路で帰国せずに、ドナウ川をくだって黒海にでて、そ

「ここから海路リザードを目指すといった複雑な迂回路を通って帰国した理由の説明がつく」

「ご明察。港の漁師たちもしていたでしょうけれど、密貿易船らしき船が、ファイルを受け取りにきた僕を乗せた小型汽船に発砲していた……という話し。あれが敵です」

アーネスト・サトウがそこでロレンスにきいた。

「それで、ファイルは？」

ロレンスはうなづくと、部下を呼んで、二冊のファイルをとってこさせた。

「残念ながら二冊だけです。真犯人のチャールズが白状しましたよ。拷問器具をみせただけ使わずに済んだのでよかったです。投資の失敗から借金の膨らんだチャールズは返済に困っていました。そこにイゾルテ島の灯台守が現れて、『従兄であるジョージ・セシルを殺し、罪を不倫している妻とその愛人になすりつければ遺産が転がり込むだろう』と殺人をそそのかした」

「なるほど、ジョージ・セシルを殺害したチャールズは、手を汚さずに莫大な口止め料を請求してきた灯台守が疎ましくなり殺害した。また、灯台守のポートに移したファイルについては、チャールズにとって無価値なもので、警察の捜査で物証になりうる感じがしたので海に沈めた」というところなのだね？」

ロレンスはうなづいて言葉を続けた。

「二冊のファイルからヒトラーは、近くオーストリーを併合する気である野望があることは判りました。オーストリーはもともとドイツ

ツ民族であり、神聖ローマ帝国歴代皇帝を輩出したところでもありません。またヒトラー自身もオーストリー人ですから野望は達成されるでしょう……問題はその先で、ジョージ・セシルを殺すほどの秘密が失われたファイルには存在していたということですよ。つまりそこ、そこからヒトラーの真の野望にいたる 設計図 だったというわけです」

シナモンは、 トリスタン島とイゾルテ島 に起こった連続殺人の捜査に重要な役割を果たしたあと、夏休み自由研究の続きを再開した。

シナモンが発掘調査をすすめていくにしたがって、かもめ岬にセツトした試掘坑の溶岩下から武器や甲冑多数をみつけ、また、そこかが、土を突き固めながら構築した砦の保塁であることも発見した。定説では、火山に伴った溶岩とされていた場所が、実は、――――戦火でどろどろに溶けてしまった古代の砦跡 溶融保塁 であつた――――ことが証明されたわけだ。

考古学者でもあるアーネスト・サトウやT・E・ロレンスが立ち会って、シナモンの発見した 溶融保塁 がローマ帝国と交戦した先住民ケルト族の砦跡であることが追認されたのである。

その話題は、コンウォール州の地方新聞どころか、ロンドンの新聞社にも伝わり、十三歳の少女が起こしたセンセーションとなって「コンウォールの才媛」、「考古学界の妖精」……という見出しが新聞各社の第一面を飾ったのだった。

夏休みの終わり、？かもめ岬の姫君？が、ロンドンに出発する日となり、いつもは閑散としたリザード駅も、その日ばかりは、シナモンを見送る人々でごったがえした。シナモンの両親である伯爵夫妻やリザード城の住民たちはもちろん、市長夫妻、市議会の名士たちも少女を見送りに出向いた。レザー警部は多忙なため駐在の若い巡査に感謝の言葉をあらわした手紙を託した。またチャーチルを首班とした諜報機関に属しているロレンスやモーガンも席を外しており、シナモンは少し寂しく思った。

狭軌道路線を走る小型機関車コツペルでゆくロンドンまでの旅にはアーネスト・サトウが同行するため何も心配することはない。シナモンが、ホームから客車に乗り込もうとしたとき、呼び止める声がかして振り向くと、ジョージ・セシル夫人エリーが、十三歳の少女を抱きしめた。

「私が弱かったばかりに、あなたを、危険な目に遭わせてしまいましたね。いつか私が強くなれたら、シナモン 私たちの……娘になつてくれますね」

涙目のエリーをみつめてしばし戸惑っていたカンカン帽の少女はやがて、「ええ、喜んで」と笑みをこぼしたのだった。

エリーは後に、ティーパーティーに供されたカップに浮かんだウバ茶のゴールデンリングが、エンゲージリングではなく、天使が頭上に戴く輪にみえたと周囲に話した。そして天使の輪をシナモンが戴いている姿を容易に想像することができたのだとも語った。

汽笛が鳴ったのでシナモンはアーネスト・サトウ列車に乗った。シナモンたちを乗せたコツペル機関車はゆっくりとホームを離れていった。ジョン少年、劇の監督を務めた商工会の青年、それに駐在

の若い巡査が手を振って後を追った。ジョン少年は、

「姫様、僕が大人になったらお嫁さんになってくださいね。きっとですよ！」

横で聞いた巡査と青年が年がいもなく少年を羽交い締めにして、

「ませガキめ、俺の台詞を横取りしやがったな」

とわめいたのであった。車窓から様子を見ていたシナモンはくすくす笑った。列車はリザード川を渡り南の森を抜け、広大な牧草地を走り抜けた。遠くにはいくつかの風車小屋、それにジョージ・セシルの屋敷もみえる。このときシナモンは単線線路に平行した小道を走るサイドカー仕様のBMWオートバイに乗った二人の人物をみつけて、少しはしゃいだ。

「あっ！」

「どうしたんだね、シナモン」

「アーネスト様、ロレンス様とモーガン様が……」

アーネスト・サトウは目を細めてみると、二人の男が手を振っているのが判った。

女嫌いで有名な アラビアのロレンス もシナモンだけには心を開くのだな あるいはこの二人 まあ、老人の野暮な想像だな……。

機関車はサイドカーを追い越していき、やがてロレンスたちやリザード城もみえなくなった。シナモンは不思議そうな顔で笑みを絶やさずにいる老紳士をみやって、

「どうなされたのですか？」

ときくと、「なんでもない」と笑みを消した。ごまかすというわけではないがアーネスト・サトウは鞆から小さな紙包みを取り出し少女に渡したのだった。

「それは私が日本にいたとき、知人の一人であるモース氏から頂いた土器だよ。コードマーク（縄文）が入っていて面白いだろう、シナモン、君にプレゼントするよ」

古代エジプトに存在したS字文様がユーラシア大陸の東端に位置する島国にも存在する。のちに 加曾利E式 と呼ばれる一片の土器が、カンカン帽の少女を飛行船の旅にいざなうことになるうとは、このとき誰もが知るよしもないことである。

第4章（終章） ウバ・ティール5

洋上に一隻のヨットが浮かんでいた。デッキには二人の少年が日光浴用の折りたたみ椅子をひろげガラスカップに入った冷たい飲み物を口にしていた。そこへ船長がやってきて、「スコルツェニー君、あの方 からの預かりものだ」

「これは？」

「ルガーP08、まがいものじゃないほんもののルガー銃だ。伝説 の名銃に恥じない働きをしるよ、スコルツェニー」

「ありがとうございます、大尉」

スコルツェニーは少年らしい屈託のない笑顔になった。新品の銃というのは油漬けになっており、一応布で油を拭き取ってはいるが、柄はまだべとついていた。スコルツェニーの相棒であるミューラー少年が、

「いいなあ、ちょっと貸せよ」

というと、

「やだね」

と少し意地悪し二人はじゃれあった。

大尉と呼ばれた壮年の船長はパイプ煙草をくわえて、

「やれやれ、 天使の顔をした悪魔 というのはこいつらのことだな……」

とつぶやき苦笑した。

油屋旅館をでた佐藤と中居はタクシーをひろった。タクシーは桑畑の広がる田舎道を走って古墳のある場所へとむかったのだった。佐藤の隣にいた中居は、

「先輩、姫様への取材内容は大丈夫ですよね？」
ときいているのだが、佐藤はがちになって上の空になっていた。

中居はあきれ顔で、「せつ、先輩、リラックスですよ、リラックス」

そういいながら佐藤の胸に手をのばした。

どきどきどき。

「最後の手段　先輩……僕を姫様だと思って練習してください。
いきますよ　お久しぶりですね佐藤様、再開できて光栄です
さあ先輩、どうぞ」

「あつ、先輩、泡をふかないください。気絶するなら取材の後ですよおーっ！」

やがてタクシーが到着し、二人のジャーナリストが魅入られたように桑畑のなかの小道を駆け出した。桑畑のなかには幾つかの古墳が存在しており、黄金の髪を後に結った若い貴婦人が古墳の谷間に立ってスケッチをしていた。

肩で息をした二人が、
「姫様」

と声をかけると、その人は振り返って変わらぬ笑みを浮かべたの

だった。

(第二部稿了)

あとがき（作家様ごっこ）

プロの作家様をならい、「あとがき」なるものを書かせていただきます。

この物語は、第1部とした「飛行船の殺人」の続編です。構想はあまりに詰めておりません。出張先で書いていたことから昔読んだ記事の記憶を頼りに書いていますので、著書名や人物の階級表記に誤りがあることを認めざるを得ません。

「飛行船の殺人」に関しても第2部ほどではありませんが、やはり誤りがあり失礼いたしました。折を見て訂正していくつもりです。

また、昨今Webを検索したところ、私の著作からの引用が多数見受けられ困惑しています。「飛行船の殺人」で紹介した「上海蟹のフリカツセ」というのは私の創作でおそらくは存在しないフランス料理のメニューです。素人小説ですから、読まれた皆さん、特に学生さん、拙作を参考にレポートとか書かないでくださいね。（笑）

ところでFC2版ブログ「飛行船の殺人」において、挿し絵をいれはじめたので興味のある方はのぞいてください。少ししたら第3部を始めます。レディー・シナモンに会いたくなったらまたここにおいでください。それではまた。

狼皮のスイーツマン

ノート2009-12-19

あとがき(作家様ごっこ)(後書き)

第3部「修道院島」は、下記(主力)サイトで連載しております。
(小説家になるっ) 転載が待ちきれない方はこちらをごらんください。

FC2サイト『伯爵令嬢シナモン』飛行船の殺人』

<http://r24eaonh.blog35.fc2.com/>

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7566j/>

伯爵令嬢シナモン 第2部 「コンウォールの才媛」

2010年10月10日18時19分発行